

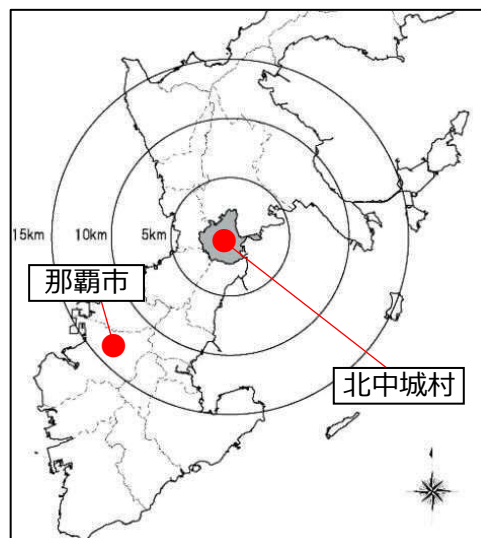
第1章 北中城村の歴史的風致形成の背景

1. 自然的環境

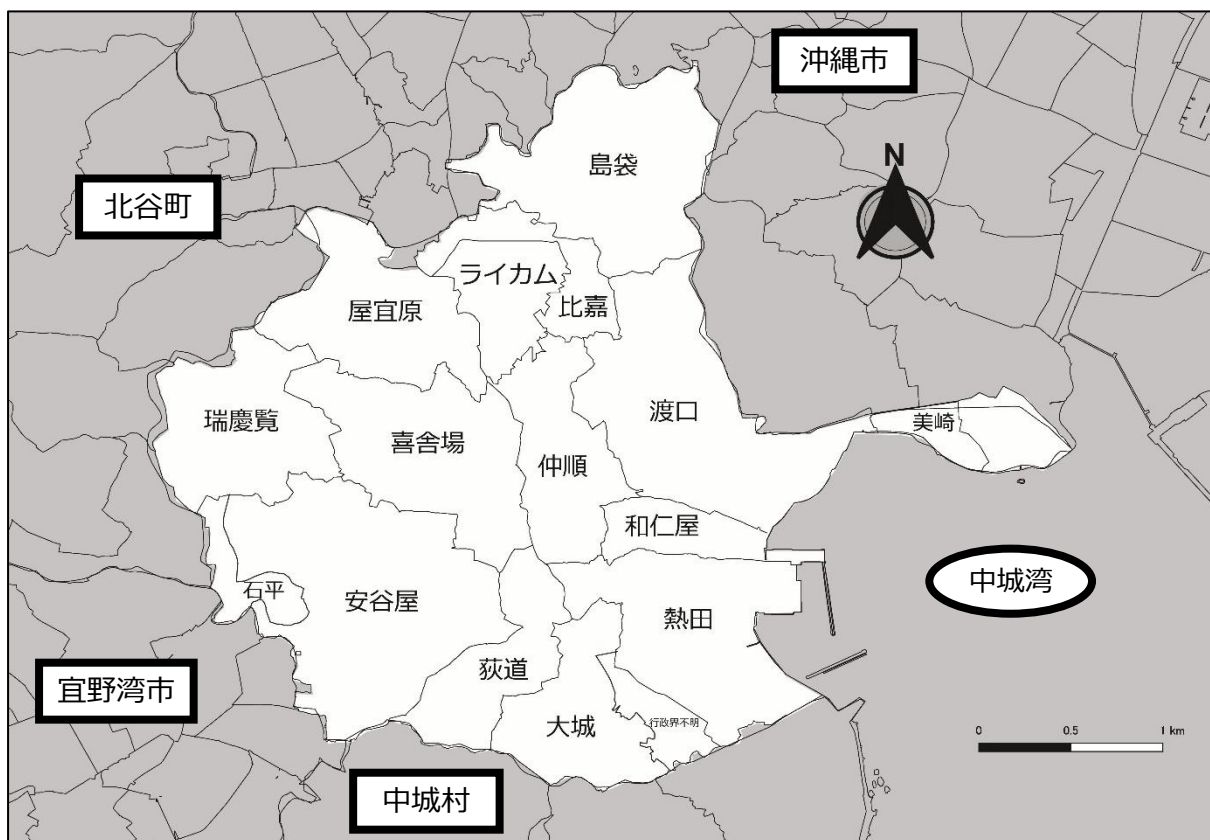
(1) 位置

北中城村は沖縄本島中部、県都・那覇市から北東へ約 16 km の距離に位置しており、北を沖縄市、南を宜野湾市及び中城村、西を北谷町に接し、東側を中城湾に面している。

村の最東端・美崎地域から最西端・瑞慶覧地域までは距離 5.3 km 程度、最北端・島袋地域から最南端・大城地域までは 4.6 km 程度しか離れておらず、面積は 11.54 km² と県内 41 市町村のうち五番目に小さい自治体となっている。



(『北中城村景観計画』より)

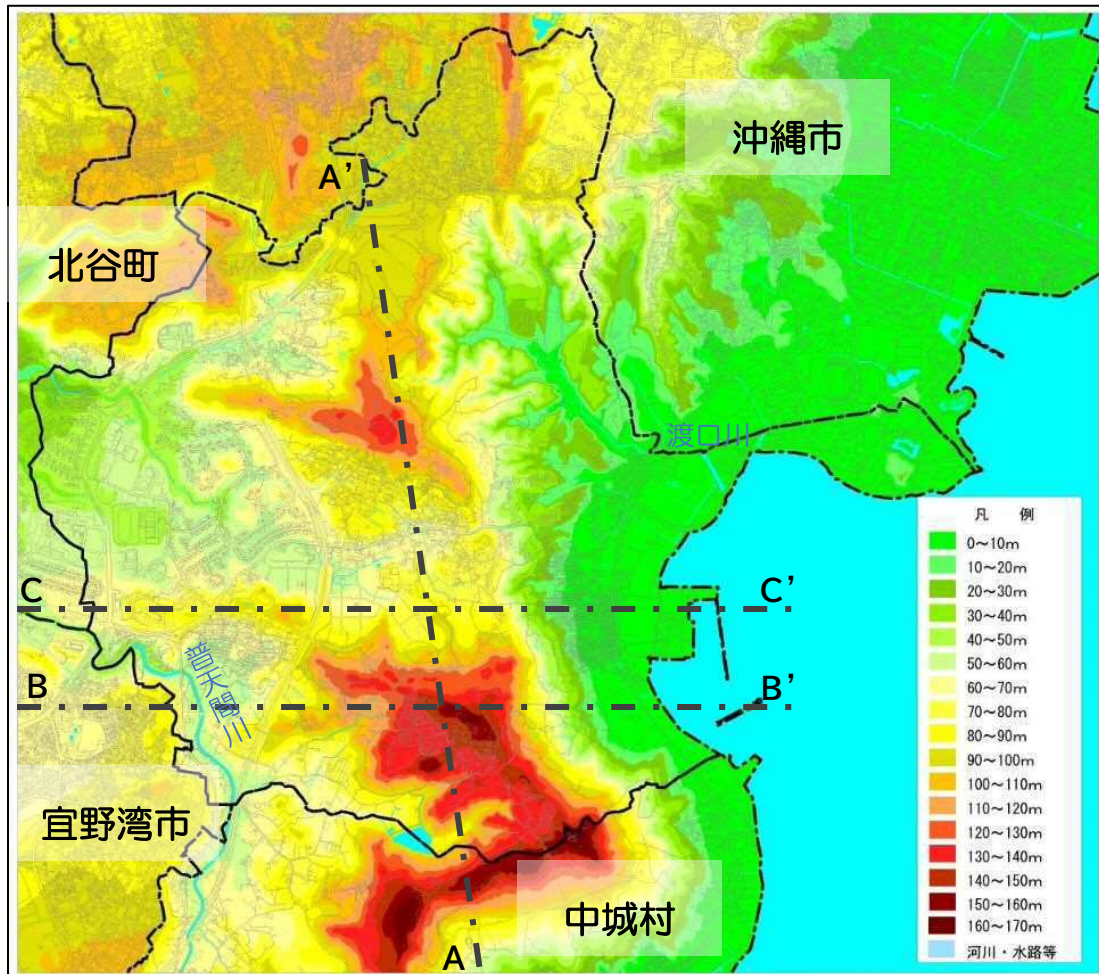


(2) 地形・地質・水系

1) 地形

本村の地形は、中城湾に面した東海岸周辺の海岸低地、二つの稜線が内陸部を東西に走る丘陵地、そして村域西側に広がる台地と、大きく三つの地域に分けられる。この起伏に富んだ地形と、内陸部の斜面緑地に広がる緑豊かな風景が本村の特徴的な景観要素となっている。

■地形図



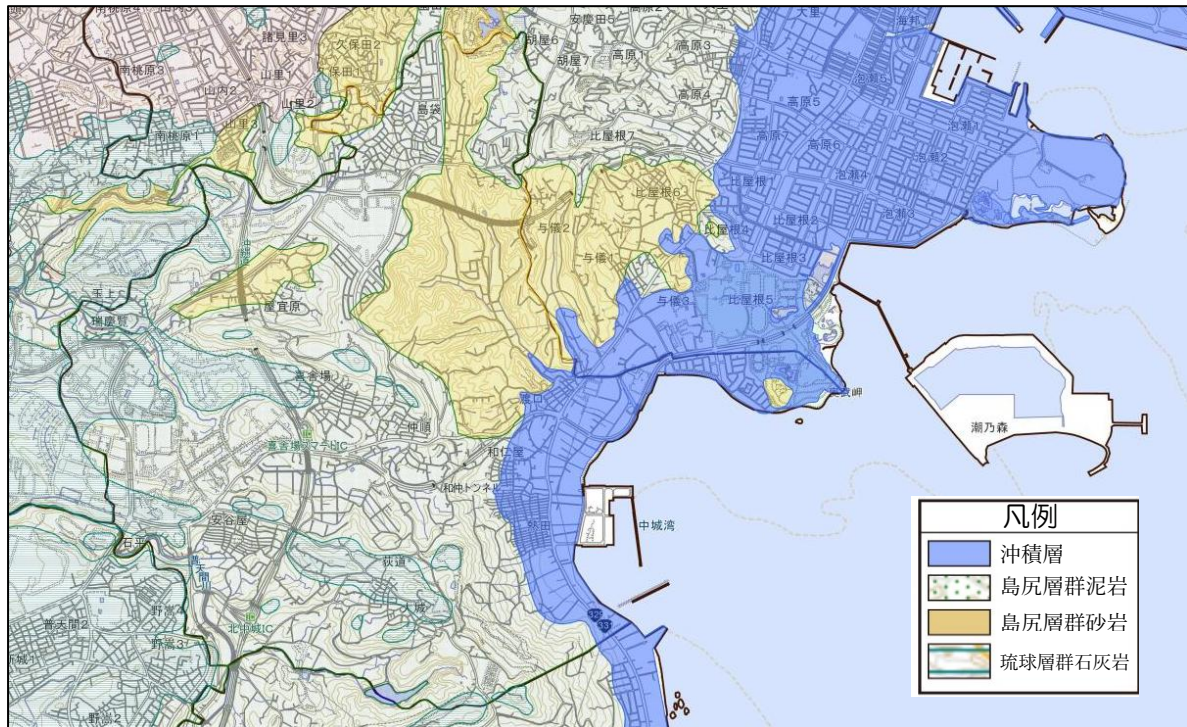
(『北中城村景観計画』より)

本村中央部に位置する二つの稜線を南北及び東西にそれぞれ切断した断面図を次頁に示す。

稜線を南北に切断したA—A'の断面図では、村北部の丘陵地を中心に喜舎場・仲順集落や商業地であるライカム地域が広がっている。なお、この丘陵地の頂上付近に、喜舎場集落の創建者といわれる喜舎場公の墓が位置している。村南部の丘陵地は、該当区域を東西に切断したB—B'の断面図と合わせてみると、大城グス

2) 地質

本村の地質は、中城湾に面した沿岸地域を沖積層が、内陸部を島尻層群泥岩（ジャーガル）や琉球層群琉球石灰岩が広域に分布している。また、村域北側の渡口・島袋・比嘉付近では、一部島尻層群砂岩の分布も見られる。



(沖縄県地図情報システム 土地分類基本調査図より)

凡例	岩相	地質時代
	沖積層（粘土・シルト・砂・礫）	第四紀
	島尻層群泥岩	新第三紀～第四紀
	島尻層群砂岩	新第三紀～第四紀
	琉球層群琉球石灰岩	第四紀

透水性の琉球層群琉球石灰岩と不透水性の島尻層群泥岩が分布する地域には、二つの地層の境界付近から雨水が湧きだす箇所が多数みられる。村内の各集落は、古くからこうした湧き水を生活用水などに利用するために、共同用水施設（カー）を整備した。カーは現在でも集落の祭祀行事の場として拝されるとともに、農業用水や植栽への散水への利用、住民の交流空間（憩いの場）や来訪者の散策の場となるなど、新たな資源としての活用が進められている。

【参考】

湧き水のしくみ ～荻道・大城湧水群の湧水機構～

湧き水のしくみ

沖縄本島中南部の地質は主に、泥岩から成る島尻層群（クチャ層などの地層）と、琉球石灰岩の層で構成されています。

琉球石灰岩の層は水を通しやすく、島尻層群のクチャなどは水を通しません。そのため、雨が降ると石灰岩層に雨水がしみこんで水を通さない島尻層群の上まで通り、高い所から低い所へ流れて地層の境目で湧き水となって出てきます。



荻道・大城の地質

荻道・大城地区の付近の地質は、大城グスクやミーグスク丘陵とゴルフ場の一部、メーヌマーチャーと呼ばれる小丘陵の辺りで琉球石灰岩の層が見られ、その下に島尻層群が広がっています。

また大城グスクやミーグスクの丘陵とゴルフ場の間には地層や岩盤が大きくずれている断層があって、東西にのびている事が分かっています。（右図参照）

湧水群の水源域

水を通しやすい琉球石灰岩のある範囲が荻道・大城湧水群の湧き水を支える水源域となっていますが、断層の北側と南側では水源域が分かれています。そのため、荻道タチガー以外の井泉の水源域は限られた範囲となっています。（右図参照）



荻道・大城湧水群周辺の地質図

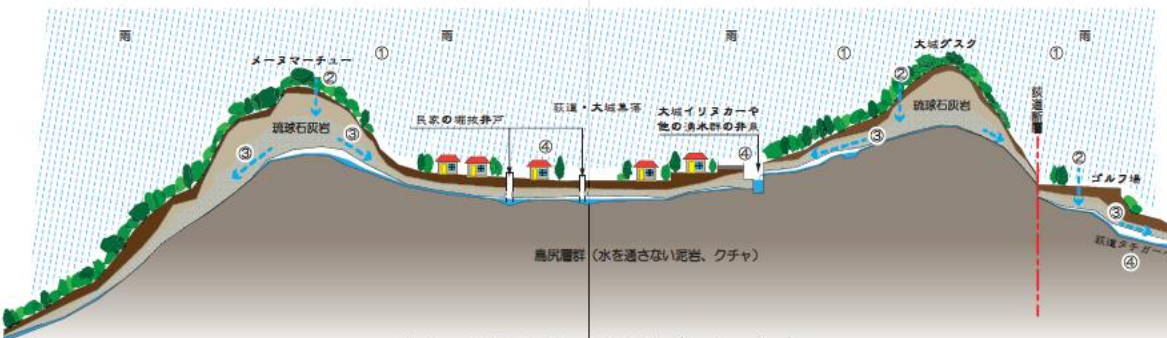
湧き水を守る取り組み

荻道・大城湧水群の水源域は範囲が限られているので、色々な開発などで石灰岩の丘陵が削られ、地表面の森や土がアスファルトやコンクリートになって水がしみ込みにくくなると、地下水が減って湧き水の量も少なくなってしまいます。

そのため、森や木を植える場所を増やし、道路なども水を通しやすい材料にして、側溝や住宅の庭などに水がしみ込む所をつくるなどの取り組みが必要です。

荻道・大城湧水群の湧水機構（メカニズム）

- ① 雨が降ります。
- ② 雨水は、森の木々などをつたって、ゆっくりと地中の琉球石灰岩にしみ込みます。
- ③ しみ込んだ雨水は地下水となって、水を通さない島尻層群（泥岩、クチャ）と琉球石灰岩の間に沿って、高い所から低い所へ向かって流れます。
- ④ 地下水は琉球石灰岩と島尻層群の境目（井泉など）や、石灰岩の割れ目で、湧水となって流れ出ます。また、集落民家の掘抜井戸の水源にもなります。



荻道・大城湧水群の湧水機構（メカニズム）
 <大城グスクからメーヌマーチャー付近にかけての断面構式図>

3) 水系

村内を流れる主な河川として、^{ふてんま}普天間川・^{とぐち}渡口川・^{きあら}佐阿良川の三つがあげられる。

その中でも普天間川は、中城村南西部を起点に北中城村安谷屋からキャンプ・フォスターを流下し、北谷町より東シナ海に注ぐ二級河川である。また、佐阿良川は、キャンプ・フォスター内を起点として北谷町内を流下しながら東シナ海に注ぐ二級河川・^{しらひがわ}白比川の支川である。

■村内を流水する河川位置図



■佐阿良川位置図



(出典：電子国土 Web：<https://maps.gsi.go.jp/>をもとに加工して作成)

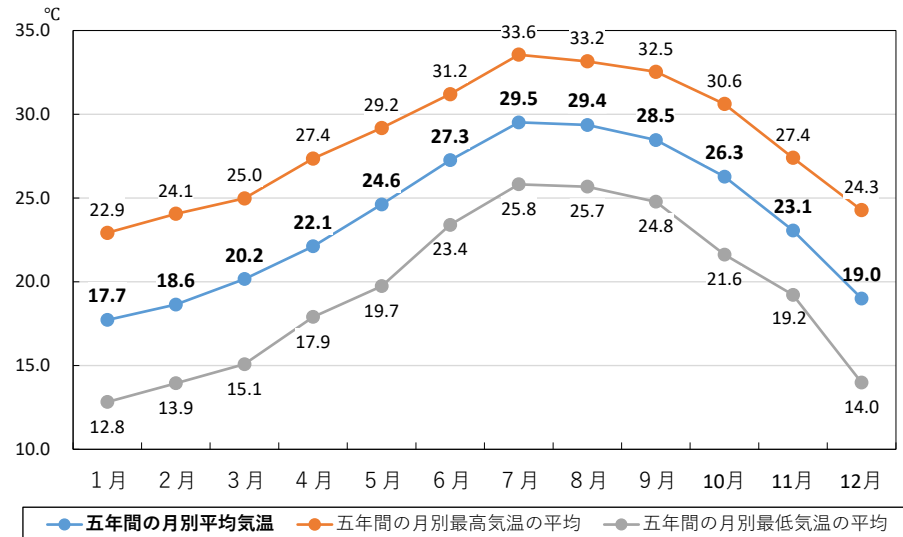
(3) 気象

沖縄地方は亜熱帯に位置し、黒潮を流れる暖かな海洋の影響を受け、年間を通して温暖な気候を維持している。また、海洋に囲まれている点や台風の影響を受けやすい地域であることから、全国的にも比較的降水量が多い。

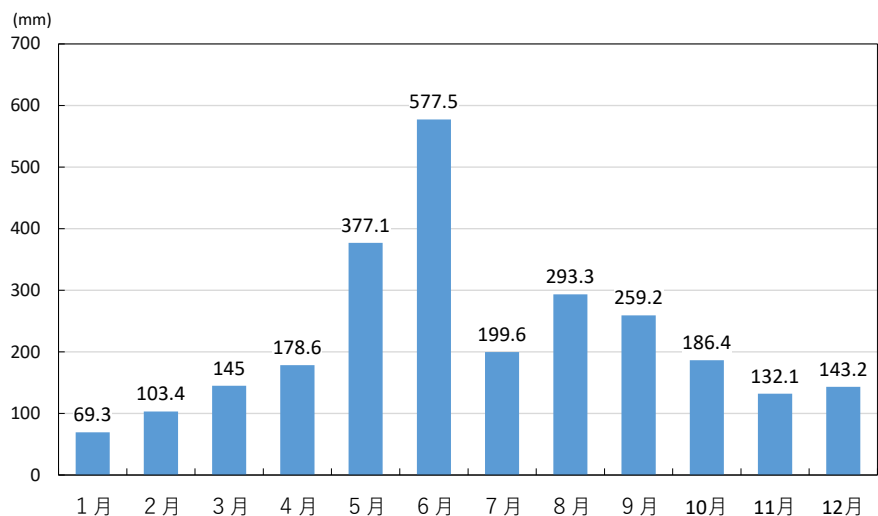
以下の図表は、村内に気象観測地点がないため、近隣地点である那覇市の観測データを示しており、一年を通じた平均気温は17度～30度を推移している。過去5年間(令和2年(2020)～令和6年(2024))の年平均気温は23.9度となっている。

月別の平均降水量をみると、梅雨の時期にあたる5～6月は降水量が多く、過去5年間(令和2年(2020)～令和6年(2024))の年間平均降水量は2,665mmとなっている。なお、沖縄本島では令和5年(2023)9月から令和6年(2024)3月頃まで、県内のダム貯水率が過去10年間の最低値を下回るなど、近年でも稀にみる渇水状況となったことから、該当する期間の降雨量は平年に比べ少雨傾向にあったものと考えられる。

■ 5年間(令和2年(2020)～令和6年(2024))の月別平均気温・月別最高気温・月別最低気温の推移



■ 5年間(令和2年(2020)～令和6年(2024))の月別平均降水量の推移



(気象庁観測データより)

2. 社会的環境

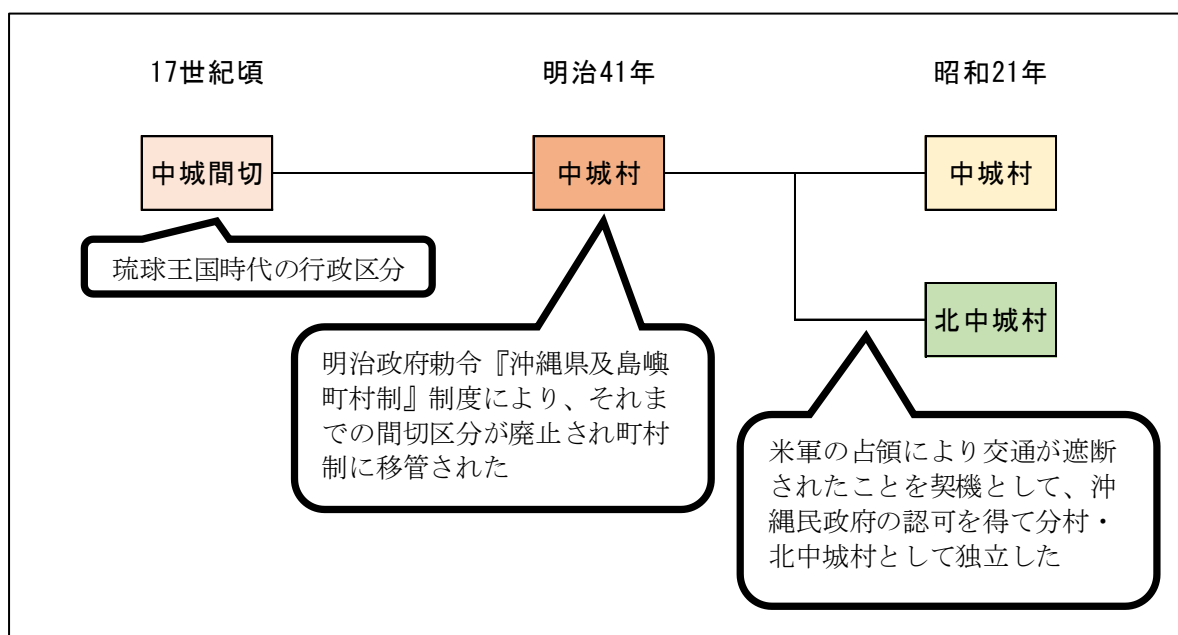
(1) 市町村の合併・分村経緯

北中城村は、もともと中城村の北部地域を形成していた。近世琉球国の各村の石高を集計した『琉球国高究帳』(崇禎8年(1635)成立)によると、17世紀頃は現在の中城村及び北中城村に加え、普天間や野嵩(現・宜野湾市域)、諸見里(現・沖縄市域)などの地域を含む27集落から中城間切が構成されていた。その後、各集落の移設や併合などを経て、明治41年(1908)に沖縄県及島嶼町村制が施行された際には、中城村域の12集落と北中城村域の11集落、計23集落から旧中城村が成り立っていた。

その間、雍正7年(1729)には、中城城跡内に間切を統治する「中城間切番所」が設置され、沖縄県及島嶼町村制施行時には「中城村役場」へ改称、昭和20年(1945)の沖縄戦で焼失するまで城跡周辺は長らく行政機能の中心地となっていた。

戦後は、現在の中城村北西部・久場集落方面から中城城跡、安谷屋集落一帯にかけて連なるように米軍施設が建設され、村の南北地域間の交通が遮断された状態となった。中城村役場も再建不能になるなど、統一的な村行政が困難であるとして分村案が提起され、南北両地域の代表者の合議の結果、沖縄民政府知事宛てに分村の申請がなされた。そして、昭和21年(1946)5月20日、沖縄民政府指令第2号により、旧中城村北部の12行政区をもって分離が認可され、新たに「北中城村」として立村した。

分村時の行政区のうち、喜舎場・仲順・島袋・比嘉・屋宜原・瑞慶覧・石平・安谷屋などは米軍用地として集落の一部を接收されており、その大半は現在も駐留軍用地として提供されている。平成22年(2010)には、上記接收地の一部(比嘉など)に建設されていた米軍の保養施設の返還に伴い、周辺一帯が字ライカムとして再編・新設され、現在の行政区域は15行政区となっている。



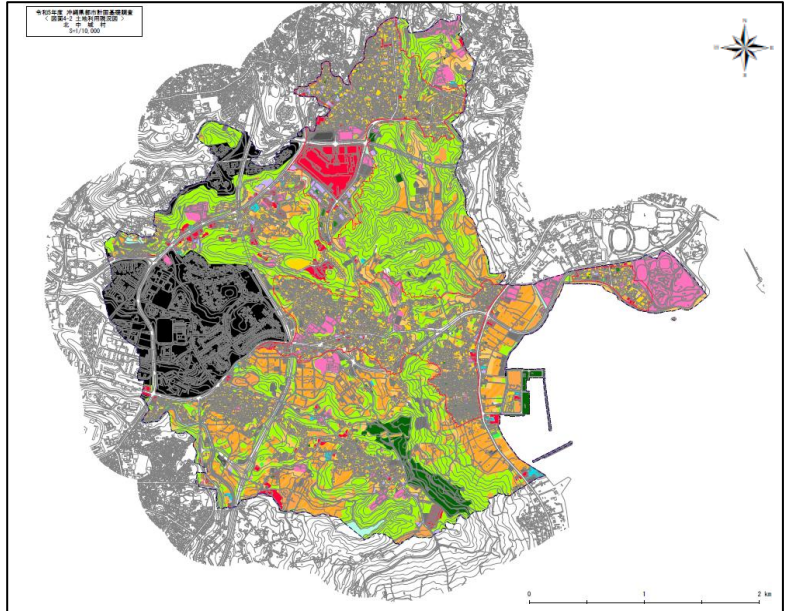
(2) 土地利用

北中城村の土地利用を大きく分けると、村域南部の田畑を中心とした地域、村域中央部の山林が大部分を占める地域、村域北部の住宅用地及び商業用地の三つに区分される。また、都市計画区域全体では、山林が約25%と大きな割合を占めている。

地区別に土地利用をみると、北端に位置する島袋地域は、隣り合う沖縄市の市街地と連坦し都市的土地利用に特化した地域となっている。

村域中央部に位置する商業用地（ライカム地区の一部）は、元々は駐留軍用地だったゴルフ場跡地が平成22年(2010)に返還された地区で、その後土地区画整理事業が進み、現在は大型ショッピングモールや医療福祉施設が立地している。

あつた わにや とぐち
熱田・和仁屋・渡口地域は、それぞれ東海岸に面した農村集落だが、近年は沿道型商業施設及び業務施設の立地が進んでいる。

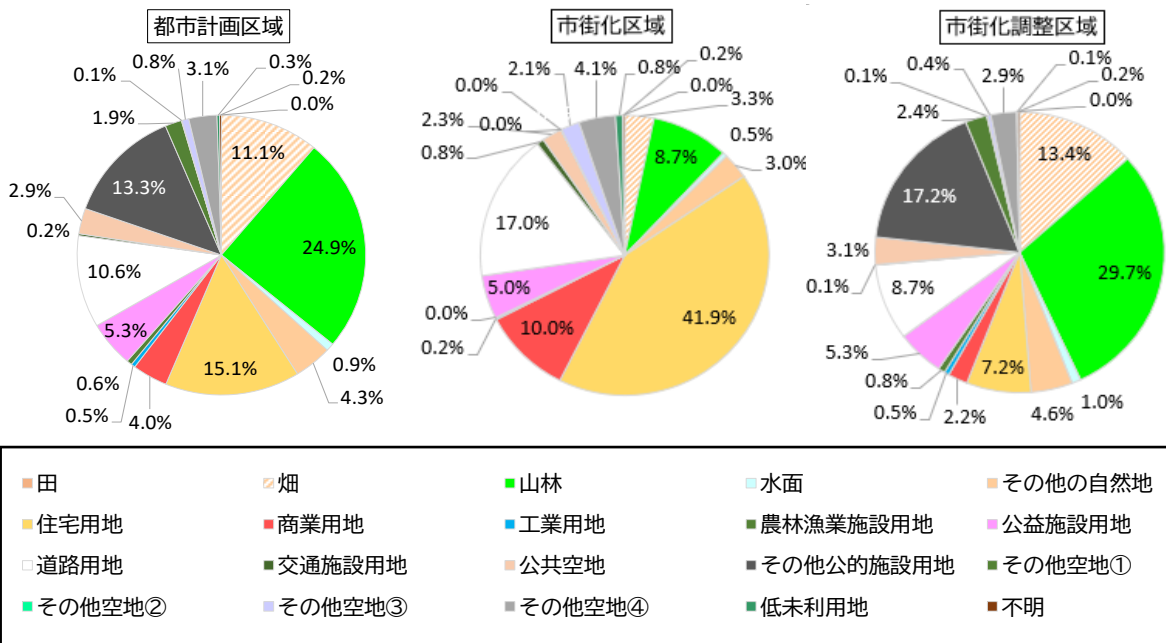


■土地利用現況図

資料：建設課

村域南部の中城城跡周辺に位置するおぎどう・大城地域は、丘陵地の田畑や山林を多く抱えており、現在も伝統的な農村集落の形態を残している。

■土地利用の構成比



※土地利用現況図「駐留軍用地」は、構成表の「その他」に含まれる。

(『土地利用現況表』より)

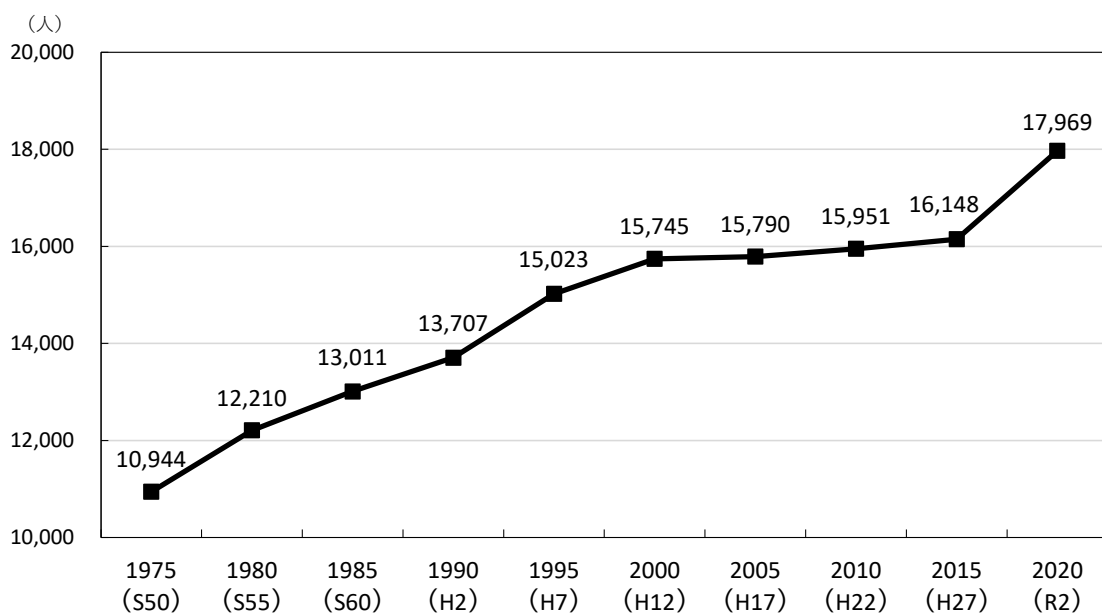
(3) 人口動態

本村の人口の推移をみると、令和2年(2020)時点の国勢調査では総人口17,969人となっており、平成27年(2015)と比較して5年間で1,800人以上増加している。また、45年前の昭和50年(1975)と比較すると7,000人以上の増加がみられ、この数十年間で北中城村は緩やかな人口増加傾向にあることがうかがえる。人口増加の要因としては、平成25年(2013)から本村において進められたアワセ土地区画整理事業によるライカム地域のまちづくりによって、当該地区における人口増が生じた点が挙げられる。

令和5年(2023)推計の国立社会保障・人口問題研究所における将来推計人口によると、本村は今後も緩やかに人口増加し、令和17年(2035)時点でピークに達し、その後緩やかな人口減少に転じるものと見込まれている。

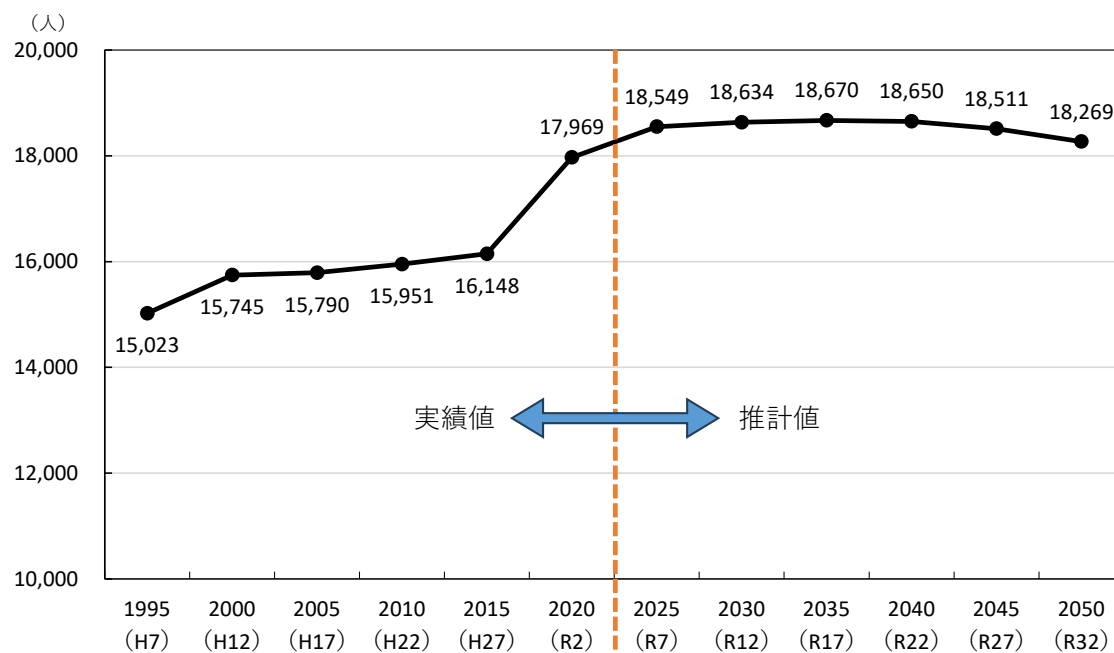
令和2年(2020)時点の年齢別人口については、年少人口(0~14歳)が16.6%、生産年齢人口(15~64歳)が59.3%、老年人口(65歳以上)が24.1%となっており、今後も緩やかな年少人口の減少傾向と急激な老年人口の増加傾向が続くことによって、急速に少子高齢化が進展していくものと想定される。

■国勢調査による総人口の推移



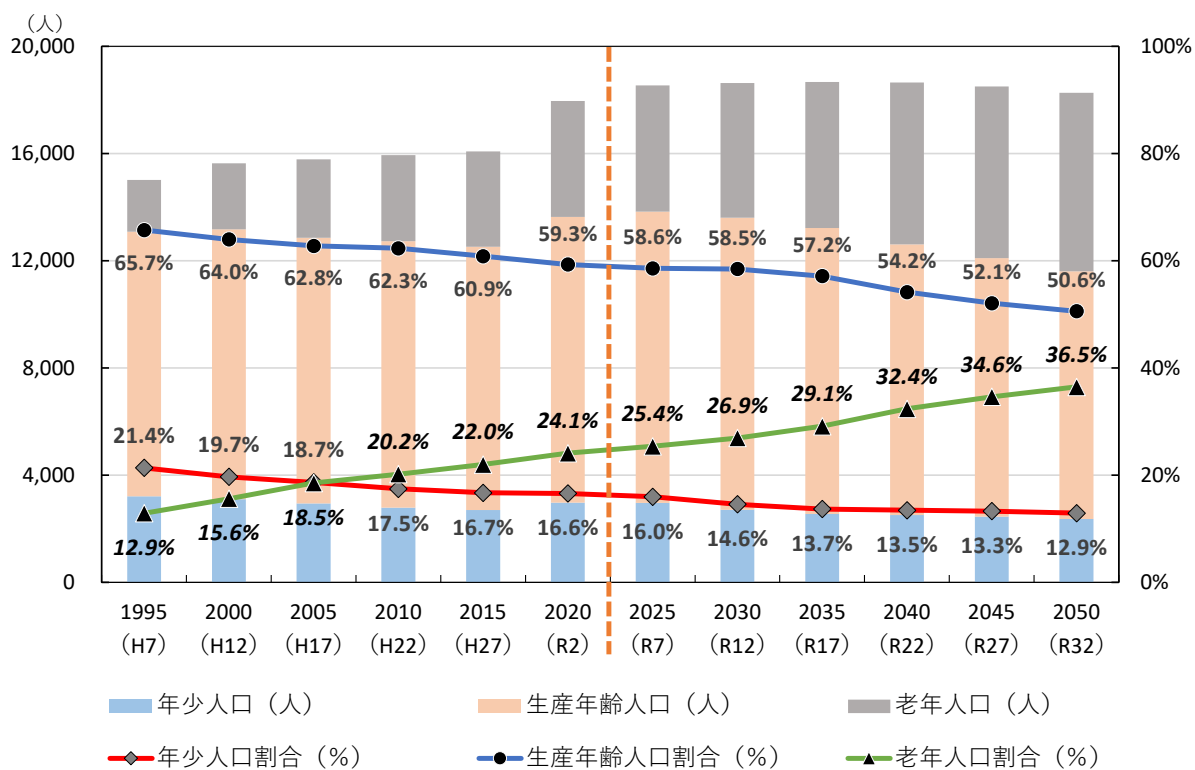
(昭和50年~令和2年『国勢調査』)

■北中城村将来推計人口（令和5年（2023）推計）



（国立社会保障・人口問題研究所公表資料より）

■年齢別人口推移（令和5年（2023）推計）



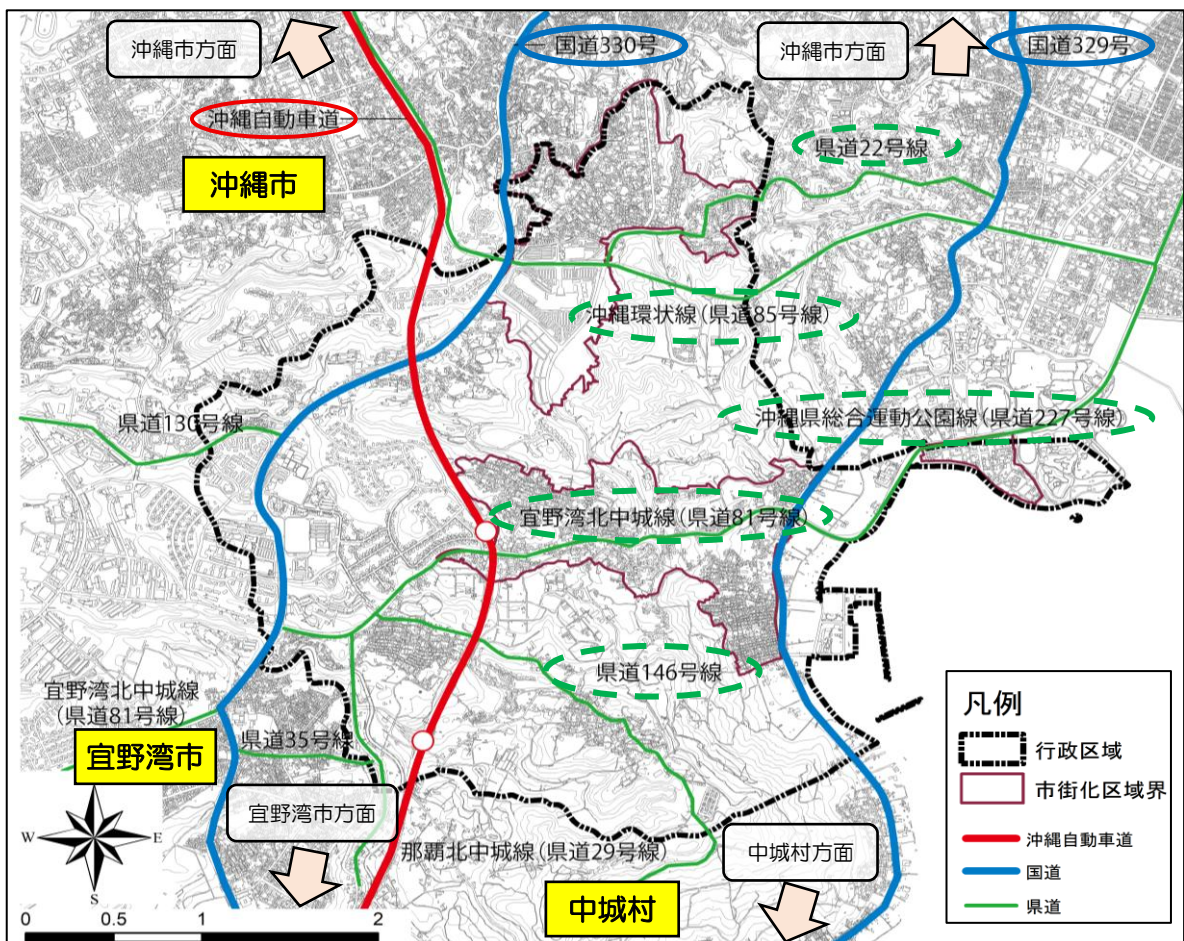
（国立社会保障・人口問題研究所公表資料より）

(4) 交通機関

本村の主要道路として、南北方向に沖縄自動車道、国道 330 号、国道 329 号が村域を通過している他、東西方向に県道 22 号線、沖縄環状線（県道 85 号線）、沖縄県総合運動公園線（県道 227 号線）、宜野湾北中城線（県道 81 号線）、県道 146 号線が整備され、格子状の道路網を形成している。

二本の国道路線のうち、国道 330 号は那覇市、沖縄市などの県内主要都市と本村を接続しており、もう一方の国道 329 号は名護市やうるま市、西原町などの東海岸沿いに位置する市町村と本村とを接続する広域道路網となっている。

■道路網の状況



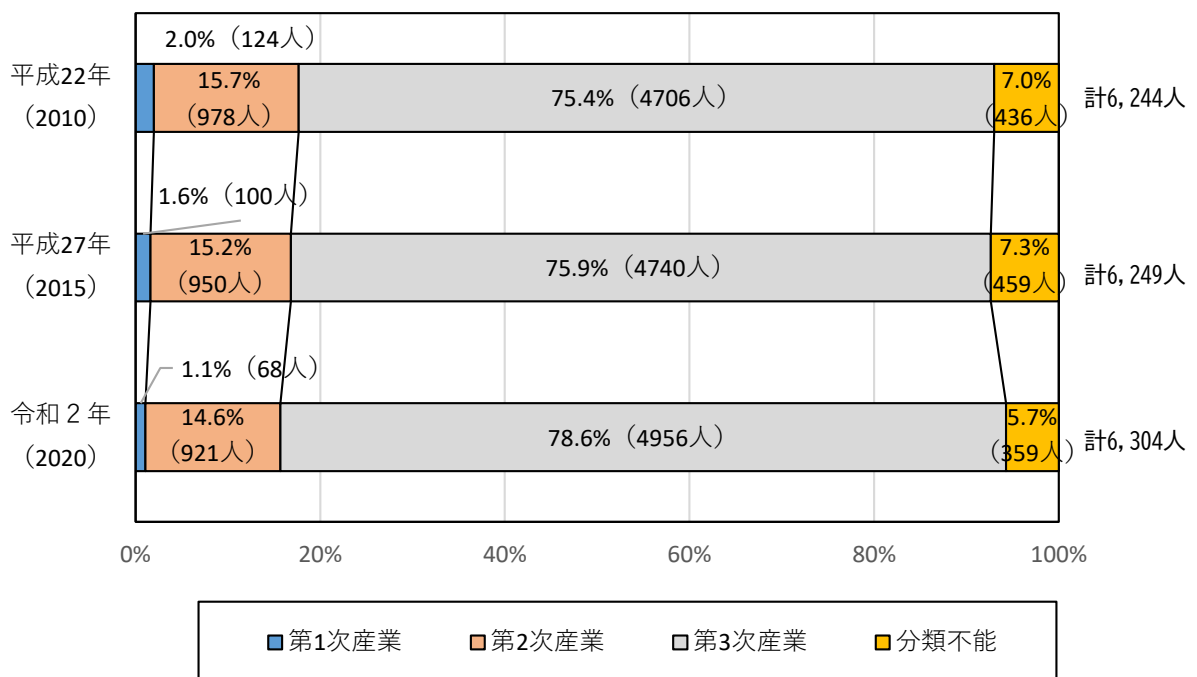
(『北中城村都市計画マスタープラン』より)

(5) 産業

令和2年(2020)国勢調査による本村の産業別就業者の状況は、就業者6,304人のうち農林水産業を示す第1次産業が1.1%(68人)、建設・製造業を示す第2次産業が14.6%(921人)、サービス業・卸売業等を示す第三次産業が78.6%(4,956人)となっている。

平成22年(2010)調査からの推移をみると、第1次産業・第2次産業ともに年々就業者数は緩やかな減少傾向にある一方で、第3次産業の就業者数は僅かに増加傾向を示している。また、村全体の就業者人口も僅かに増加している。

■産業別就業者率(数)



(平成22年~令和2年『国勢調査』より)

①第1次産業（農業・漁業）

令和2年(2020)国勢調査時点での全体就業者数に占める第1次産業就業者の割合は1.1%と最も低く、年々減少傾向にある。販売を目的とした農畜産物の作付・飼育状況としては、いも類や工芸農作物（さとうきび）、野菜類を生育している農業経営体があるものの、県内他市町村と比較しても産出量は多くない。

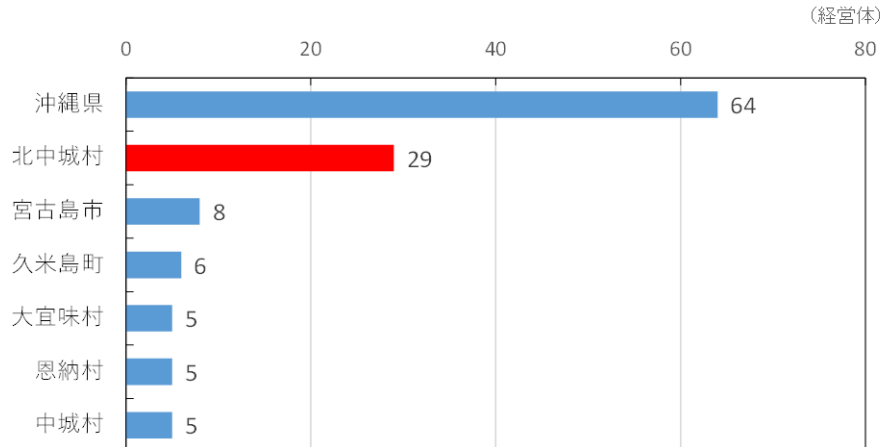
漁業については、アーサ（あおさ・ヒトエグサ）を村の名産品として生育しており、海面養殖の中でも特にのり類の養殖を行っている漁業経営体数の比較をみると、沖縄県全体で最も多く29経営体にのぼる。

■販売を目的とした農畜産物の作付・飼育状況

			作付経営体数	作付面積 (ha)
稲・麦・雑穀			x	x
いも・豆類	いも類	ばれいしょ	2	x
		かんしょ	1	x
	豆類	大豆・小豆以外豆類	3	0
工芸農作物		さとうきび	12	6
野菜	キャベツ		3	0
	レタス		2	x
	ねぎ		3	x
	たまねぎ		1	x
	ブロッコリー		2	x
	きゅうり		1	x
	なす		1	x
	トマト		2	x
	その他野菜		7	3
果樹	その他果樹		3	2
花き	切り花類		6	x
畜産	採卵鶏		1	x

(2020年農林業センサスより)

■県内の「のり類養殖」経営体数



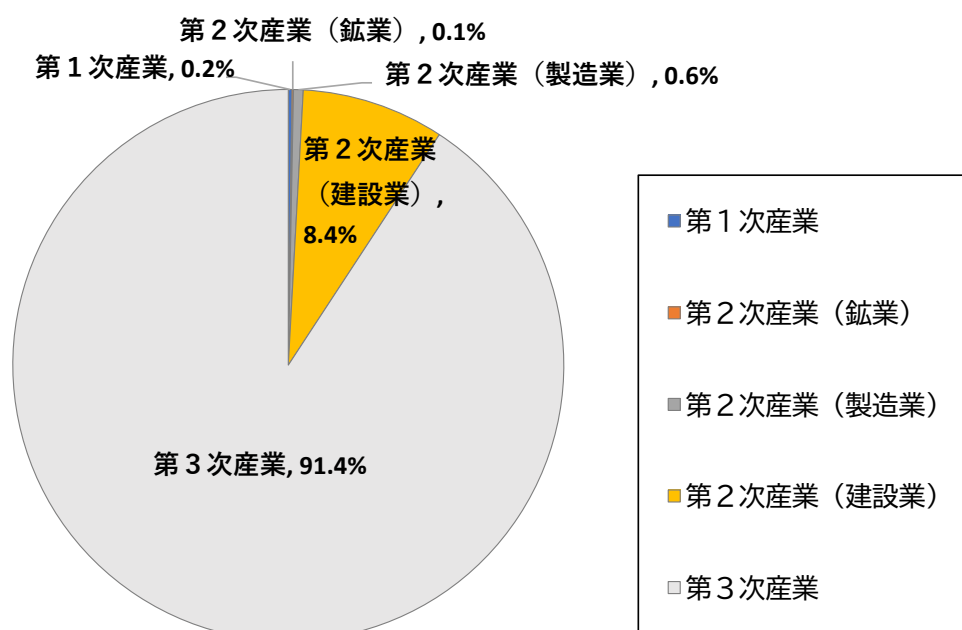
(2023年漁業センサスより)

②第2次産業（建設・製造業）

北中城村の第2次産業の状況について、令和4年度沖縄県市町村民所得（令和7年公表）の総生産割合をみると、村全体の総生産のうち9.1%を第2次産業が占めている。このうち、建設業が8.4%、製造業及び鉱業が0.7%となっている。

また、令和3年度経済センサスによると、村内の第2次産業は建設業が51事業所（従業者587人）、製造業が19事業所（従業者127人）となっている。製造業の内訳をみると、事業所数が多いのは、窯業・土石製品製造業、食料品製造業、繊維工業であり、いずれも3～5事業所程度の規模となっている。

■産業別総生産割合



（令和4年度沖縄県市町村民所得より）

■第2次産業の事業所数・従業員数

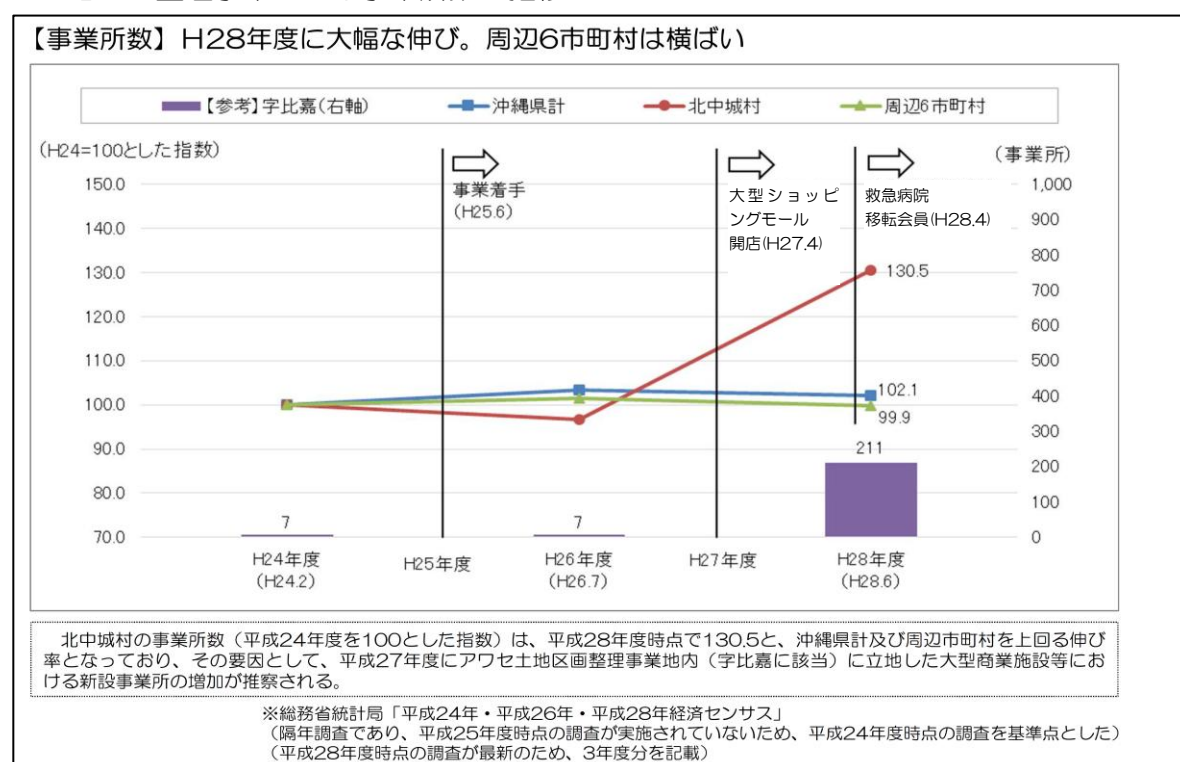
	事業所数 (事業所)	従業員数 (人)
鉱業	-	-
建設業	51	587
製造業	19	127
食料品製造業	4	34
繊維工業	3	22
窯業・土石製品製造業	5	6
金属製品製造業	1	36
その他	6	29

（令和3年度経済センサスより）

③第3次産業

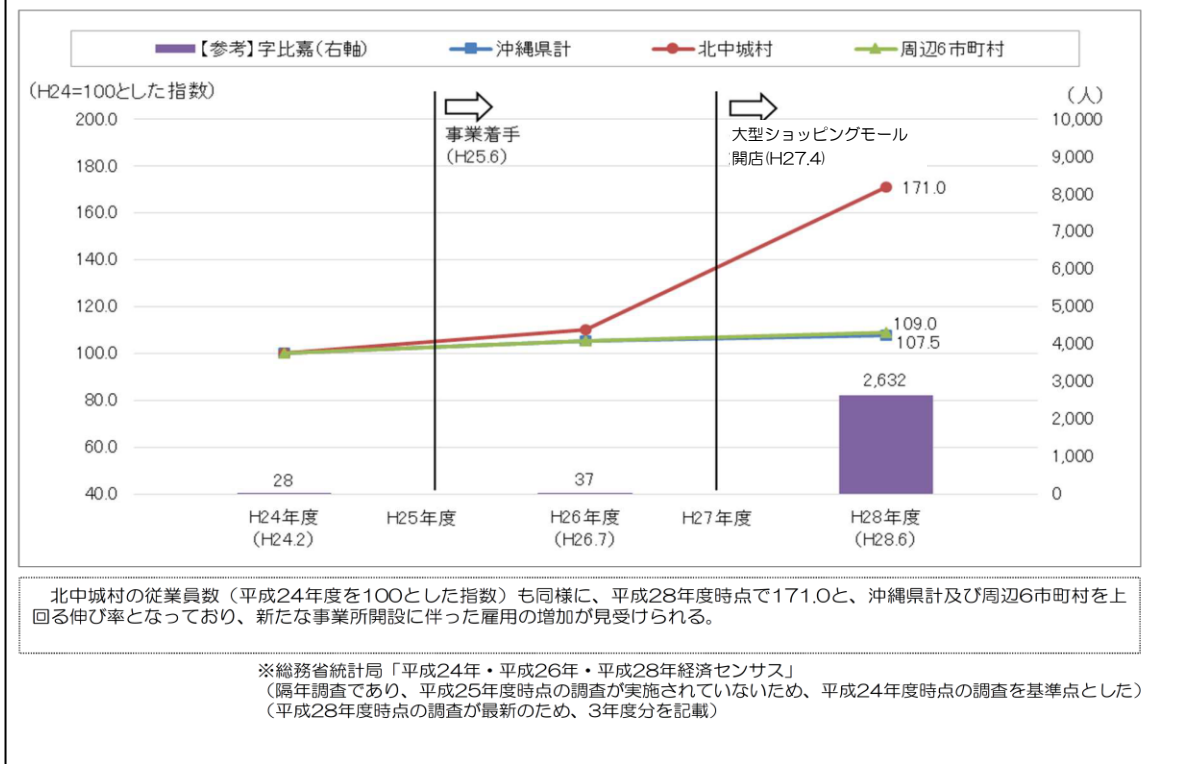
平成22年(2010)に米軍保養施設から返還された約48haもの広大な跡地を活用して行われたアワセ土地区画整理事業(平成25年度(2013)～令和元年度(2019))によって、ライカム地区では大型ショッピングモールやヘリポート付き救急病院、体育館施設等の設置が進められ、県中部圏域全体の活性化に寄与するような経済効果をもたらしている。令和2年(2020)10月に公開された『北中城村アワセ土地区画整理事業による経済効果分析報告書』では、平成24年度(2012)から平成28年度(2016)にかけて村内事業所数・従業員数がともに大幅な伸び率を示している他、村民所得も増加傾向を示していることが示されている。

■土地区画整理事業による事業所数の推移



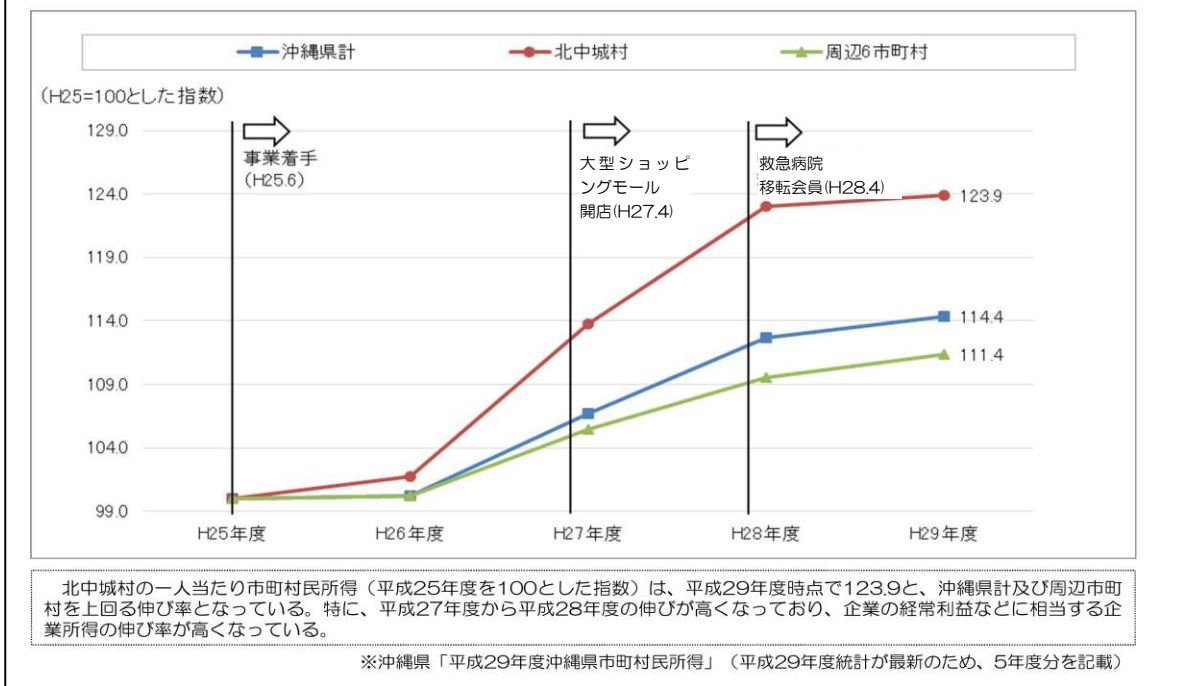
■土地区画整理事業による事業所従業員数の推移

【従業員数】 H28年度に大幅な伸び。周辺6市町村は堅調な伸び



■土地区画整理事業による市町村民所得の推移

【一人当たり市町村民所得】 増加トレンド。周辺6市町村を含め堅調な伸び



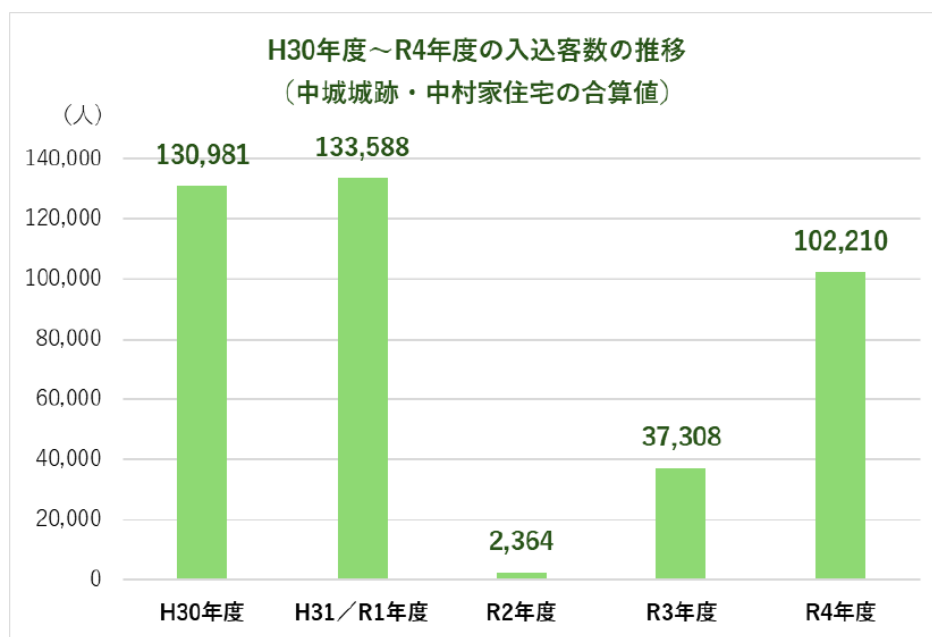
(6) 観光

本村では、平成12年(2000)に「琉球王国のグスク及び関連遺産群」の九つある構成資産の一つとして世界遺産に登録された中城城跡や、近世の伝統的な住居建築様式を維持した建造物として重要文化財指定された中村家住宅などが貴重な観光資源となっている。

両施設への入込客数の推移をみると、平成30年度(2018)から令和元年度(2019)にかけては年間13万人以上の観光客が記録されている。令和2年度(2020)においては新型コロナウイルス感染症の影響により、前年度比の50分の1以下まで入込客数が減少したものの、次年度以降は緩やかな回復傾向を示している。

近年では、中城城跡の自然豊かな眺望や中村家住宅の伝統的な家屋の雰囲気を活用した村民・県民向けイベント、ツアー等も実施されていることから、今後のインバウンド需要の回復とも連携させながら、さらなる誘客を図る取り組みが求められている。

■中城城跡・中村家住宅への観光入込客数（合算値）の推移



(第2次北中城村観光振興基本計画より)

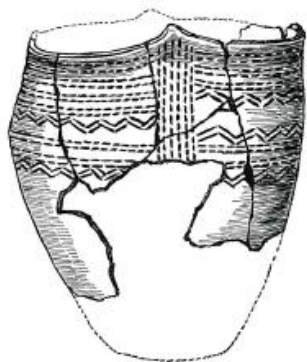
3. 歴史的環境

(1) 歴史

1) 先史・原史時代

① 縄文時代

北中城村内の代表的な縄文時代の遺跡として、史跡^{おぎどう}荻堂貝塚がある。村南部の荻^{おぎ}道^{どう}（遺跡発見当時の旧表記は荻堂）集落北側、標高約 140mの石灰岩丘陵の崖下に形成された約 3,000～3,500 年前の遺跡で、明治 37 年(1904)に東京帝国大学の鳥居^{とりい}龍^{りゅう}蔵^{ぞう}が発見し、大正 8 年(1919)に同大学の松村^{まつむらあきら}瞭^{りょう}によって発掘調査が実施された。出土した土器は「荻堂式土器」として型式設定されており、縄文時代後期に位置づけられている。



■復元された荻堂式土器
（「琉球荻堂貝塚」より転載）



■遠景 中央部右側の崖下緑地帯が荻堂貝塚

この他の出土遺物として、石器や貝器、骨製装飾品、魚類・イノシシ・イヌ・ジュゴンなどの骨が確認されている。遺跡の本体（当時のヒトの住居跡など）は、豊富な湧水が点在する石灰岩丘陵上に存在していたものと考えられる。

この他に村内には同時期の遺跡として仲^{ちゅん}順^{じゅん}原^{げん}貝塚や、縄文時代晩期のものとみられる荻道遺跡が確認されている。



■遠景 荻道遺跡



■近景 荻道遺跡

②弥生～平安並行時代

弥生～平安並行時代とは、沖縄諸島が依然として原史社会の段階であった紀元前3世紀頃から10～12世紀頃までの時代を指す。日本本土の時代区分としては、弥生時代から原史時代を経て、古代国家が成立・発展、そして衰退していく時代に相当する。

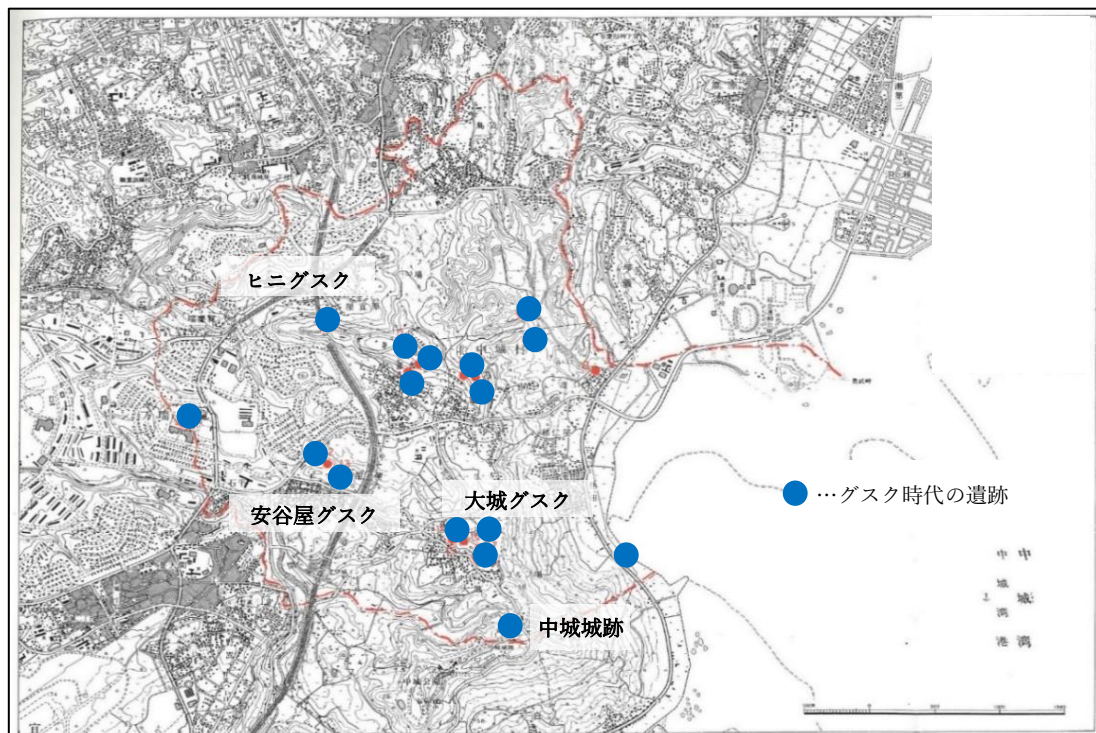
同時代に位置づけられる本村の遺跡として、村北西部の渡口集落の渡口洞穴遺跡がある。奥行数メートルの洞穴からは、前庭部分に弥生～平安並行時代末期のものと考えられる無文の土器片や貝殻などの遺物が採集された。



■渡口洞穴遺跡入口と前庭部分

③グスク時代

グスク時代とは、グスクと称する城塞的遺構を象徴して名付けられた考古学上の編年区分である。おおよそ12世紀頃から16世紀初頭までを指し、日本本土の時代区分では平安時代末から室町時代、安土桃山時代に相当する。琉球史の時代区分では、概ね古琉球時代の前半期に相当するものとみられ、狩猟や漁労などの採集経済から、鉄器の導入などを伴った農耕中心の生産経済へと移行した時代である。按司と呼ばれる地方領主の出現やグスクの築城、対外貿易の開始など、国家の形成へと向かう階級社会の段階にあり、琉球史全体において重要な画期となった時代といえる。北中城村において、同時代に位置づけられる遺跡は十六か所確認されている。



あだにや
安谷屋グスクは、村南西部の安谷屋集落の標高110メートル程の丘陵上に築かれており、一部で石積みが確認されている他、陶磁器やグスク土器が採集されている。

右写真中央の若松遺跡は、安谷屋グスクと関連するとみられるグスク時代の集落跡である。昭和62年(1987)から平成元年(1989)にかけて公園整備に伴う発掘調査が実施されており、グスク土器や石器、中国産陶磁器、金属製品、鉄滓などのグスク時代～近世にかけての遺物のほか、建物の柱穴が多数検出されている。なお、遺跡との関係性は判然としないが、公園敷地南側の発掘調査において石畳道の存在が明らかになっている。



■遠景 安谷屋グスク・若松遺跡・中城若松の墓



グスク土器



青磁雷文帯碗 (14c 後半～15c 前半)



染付皿 (14c 後半～15c 前半)



青磁細連弁文碗 (15c 後半～16c 前半)



金属製品 (鏡方垂飾)



金属製品 (刀の切羽)

■若松遺跡から出土した陶磁器等

また、遠景写真（27 ページ）左側の丘陵には、組踊『執心鐘入』の登場人物のモチーフとされる中城若松の墓が所在している。中城若松は、第二尚氏初代国王の尚円王の子供と伝えられており、尚円王が即位した成化4年(1468)以降に安谷屋グスクの最後の城主となったと伝えられている。

出土した遺物から14世紀頃の遺跡とされるのが、村南部の大城～荻道集落にまたがって広がるイーヌムイという丘陵上に位置する大城グスクである。グスク内部には祭祀の際に拝される大城御嶽があり、大城集落の聖域となっている。フェンサ上層式土器や青磁、石器片などが採取されている。首里王府の英祖王統初代国王である英祖王の第三王子・中城王子の居城であったという。



■大城グスク遠景、中央緑地部



■中城城跡 遠景



■中城城跡 二の郭

正確な築城年代は不詳だが、14世紀頃に先中城按司によって築かれたとされているのが世界遺産中城城跡である。標高約160mの石灰岩丘陵上に位置する六つの郭からなる連郭式の山城で、北中城村から中城村にまたがって所在している。

15世紀頃、勢力を拡大していた勝連グスク城主・阿麻和利を牽制するため、時の中山王・尚泰久が読谷山按司・護佐丸を座喜味グスクから中城グスクへ配したと伝えられる。三の郭と北の郭は他の城郭と石積みの技法が異なることから、護佐丸によって増築されたものと考えられている。

伝承によると、阿麻和利は勢力拡大の野心を抱いていたが、護佐丸が守りを固めていたことから兵を挙げることができず、一計を案じて尚泰久へ“護佐丸が謀反を

企んでいる”旨を讒訴^{ざんそ}する。王が阿麻和利に命じて護佐丸へ軍勢を差し向け、城を取り囲んだが、王の軍に逆らうことは出来ないと護佐丸は自害した。その後、阿麻和利は尚泰久^{しょうたいきゆう}を攻略しようと企てたが、事前にその動きを見破られて滅ぼされた。この一連の事件は、「護佐丸・阿麻和利の乱」として現在も伝えられており、18世紀頃には玉城朝薫^{たまぐすくちようくん}によってこの伝承を題材にした組踊『二童敵討』^{にどうてきうち}も創作された。

この時代に各地で集落が形成され、社会の発達とともに集落と集落を結ぶ道やグスクとグスク、グスクとムラを結ぶ道ができ始めたと考えられている。また、複数の集落が集まり「間切^{まぎり}」という行政区分が編成されたとされているが、その起源について詳しいことは分かっていない。間切には、現代でいう行政機能を担う間切番所が設置された。首里王府の命によって編集された地誌『琉球国旧記』^{りゅうきゅうこくきゆうき}（以下「旧記」）（雍正9年(1731)成立）によると、首里王府からの公文書を各間切に届けることを宿次^{しゆくつぎ}といい、宿次の中継点である間切番所は「駅」として記載されている。首里城を起点として各間切番所をつなぐ街道は宿道^{しゆくみち}として形成され、陸上交通の主要な道路となっていく。中城間切を通過する宿道は中頭方東海道（首里→西原→宜野湾^{ぎのわん}→中城^{なかくすく}→具志川^{ぐしかわ}→勝連^{かつれん}）のルート上にある。

なお、明治14年(1881)に、中城番所（中城城跡）から大城集落、荻道集落、安谷屋集落を経て越来^{こえく}へ至る集落の道を巡察した県令・上杉茂憲^{うえすぎもちのり}の巡回日誌には、「午前九時番所ニ帰ル。須臾ニシテ、中城ヲ発ス。路右ニ折ル。青松ノ間ニ入り、坂ヲ下ル。坂尽キテ蔗圃蕉園多シ。将ニ大城村ニ入ラントス。村吏二名、礼服ノ袖ヲ纈シ、路傍ニ拝迎ス。村間ヲ貫キ過キ、安国（谷カ）屋村ニ入ル。村落皆礪石ヲ以テ疊成ス。」（『北中城村史 第七卷 文献資料編』（平成24年(2012)））とあり、安谷屋集落の道が石畳道であったことがうかがえる。現存する若松遺跡内の石畳道との関連性は不明だが、番所と番所をつなぐ宿道として整備されたものではないかともいわれている。

2) 近世 (1609年～1879年)

近世初期、万曆37年(1609)に薩摩藩が琉球入りしたことにより(琉球侵攻)、琉球王国は薩摩藩の支配下に置かれることとなった。薩摩藩は臨時的な奉行の設置・派遣を行い、琉球王国の政治・外交に対する監視は明治5年(1872)まで続いた。

この時代、北中城村は中城間切の一部を形成していた。中城間切は、第二尚氏第4代国王 尚清が王子の頃に拝領し、以降王府の世子領(後に王位に就く王子の領地)とされていた。18世紀後半の製作とみられる『間切集成図』では、当時の中城間切の範囲や番所、村々の位置などをうかがうことができる。



■「間切集成図」
(沖縄県立博物館・美術館蔵)

万曆39年(1611)、雍正7年(1729)に中城城跡内に間切番所が建てられた。その後、明治41年(1908)には村役場と名称を改め、沖縄戦で焼失するまで使用された。



■中城城跡内に設置された中城間切番所
(『北中城村村勢要覧』より)

かんぽう
咸豊2年(1853)には、沖縄を訪れたペリーが派遣した探検隊が那覇の港から首里を経て、中城城跡等を調査しており、その記録の中で「要塞の資材は石灰岩で、その石造建築は賞賛すべき構造のものであった」などと記している。随行した絵師ハインが描いた精密なスケッチは、後に中城城跡を修復する際の参考資料となった。



■中城城跡を測量するペリー提督の探検隊
(西の郭内から正門付近をながめた風景/
中城村教育委員会所蔵)

また、重要文化財中村家住宅については、正式な建築年代は不明であるが、19世紀初め頃には、首里にあった土族の屋敷を村南部の大城集落に移築したと伝わっている。

中村家は、大城安里と称される豪農で、地頭代(現在でいう村長のような役職)を輩出する家柄にあり、伝承では先祖は護佐丸の師匠として中城へ移ってきたとされている。



■中村家住宅

3) 近代 (19 世紀末～20 世紀中頃)

19世紀末の日本の明治維新を経て、明治12年(1879)には琉球王国が解体され、沖縄県が設置された(廃琉置県)。時代は近代社会に向かうこととなる。明治41年(1908)には、「沖縄県及島嶼町村制」が施行され、間切・島が町・村に、村が字になり、間切長が村長に、村頭が区長に改称された。同年、中城間切も中城村に改められ、村長、収入役、書記の要職が知事または郡長から任命された。

本村の農業生産の状況は、17世紀中頃の石高記録においては田が約70%、畑が約30%、基幹作物はイネであったが、17世紀後半には換金作物となる甘蔗(サトウキビ)の普及により畑作が広がりはじめ、明治36年(1904)の村内の総反別、田畑の状況において全ての集落で畑が田の反数を上回り、この頃には既に稲作から畑作に移行していることがうかがえる。



■島袋の共同製糖場(昭和14年)

明治末から昭和初期にかけてサトウキビの作付面積も増加し、昭和10年(1935)の喜順製糖工場を皮切りに、昭和14年(1939)に和仁屋の共同製糖工場、島袋の製糖工場など、発動機による製糖工場が村内に次々と建設された。

また、本村は移民の多かった地域としても記録を残している。明治32年(1899)に県内から最初の移民が送り出されると、村からも明治36年(1903)に最初の移民が送り出され、貧しさからの脱却を目的に多くの村民がハワイ、ペルー、ブラジル、アルゼンチン、フィリピンなど国外へ渡った。県の「沖縄県保安課調査(昭和5年(1930))」によると、県人海外移民数32,373名のうち、中城村は3,052名となっており、県内で最も移民数が多かった。村内には、当時の移民船を見送ったとされる場所や、見送りの際にハーメーチゲン(小太鼓)を打鳴らしながら、「だんじゅかりゆし」の歌を唄って航海安全を祈願したとされる言い伝えも多く残っている。



■北中城村喜舎場・仲順・瑞慶覧出身のブラジル・サンパウロ移民

この間、日本本土との関係性の中で、沖縄は国防のための軍事力強化を強いられることとなる。明治政府は明治12年(1879)の^{はいはん ちけん}廃藩置県後、沖縄県へ軍事視察を行い、沖縄県が地理的にも国防軍事上、重要な位置にあることを確認した。中城湾が日本海軍の軍港に指定されたのは明治28年(1895)の日清戦争終結の頃だが、それ以来、中城湾には日本艦隊の出没が繰り返され、昭和初期には大艦隊の^{ていはく}碇泊も見られたという。

日本は日清戦争以降、中国から得た賠償に対する三国干渉を受けて日露戦争(明治37~38年(1904-1905))の開戦、中国への進出を主張する軍部の独断による満州事変(昭和6~8年(1931-1933))の拡大、世界情勢の変化による米欧諸国との対立を経て、太平洋戦争(昭和16~20年(1941-1945))の開戦へと進んでいく。戦況が悪化する中、昭和20年(1945)には日本本土への直接的攻撃として沖縄戦が始まった。中城一帯を東端とする中頭の中部地域を皮切りに、民間人を含む多くの犠牲者を生み出した激しい地上戦が展開された。

4) 現代 (20 世紀中盤以降)

①第二次世界大戦後～祖国復帰まで (1945～1972 年)

昭和 20 年(1945) 3 月 26 日に米軍の上陸部隊が慶良間諸島に上陸し、沖縄における地上戦が開始された。4 月 1 日、米軍が沖縄本島中部の西海岸に上陸すると、北中城地域まで破竹の勢いで進攻した。4 月 4 日から 5 日頃には、北中城地域の全域が占領地域となった。4 月 4 日には島袋に収容所が開設され、周辺地域で保護された住民が次々に収容された。

同年の戦争終結後、各収容所に収容されていた住民は順次開放され、各集落へ帰村を果たしたが、瑞慶覧ずけらんなど一部集落では戦後 70 年以上が経過した現在でも、元々の土地が米軍基地として接收されたままとなっている。

戦後は久場崎くばさき (現中城村) から安谷屋 (現北中城村) にかけて米軍施設が設置されたことにより、旧中城村域内で南北の交通が遮断され、従来の行政区域での行政施行が困難な状況となった。そこで、沖縄民政府への申請・認可を経て、旧中城村域の北部地域が分村し、昭和 21 年(1946) 5 月より北中城村としての村



■北中城村役場が置かれた大順堂醫院

行政がスタートした。戦後最初の村役場は、村中央部の仲順集落ちゅんじゅんにあった大順堂醫院だいじゅんどうの敷地の一部が活用された。その後、昭和 23 年(1948)に喜舎場きしゃぼに移転し、現在まで村役場が置かれている。なお、戦前まで役場が置かれていた中城城跡 (役場施設は戦火で焼失) では、戦後に沖縄民政府により公園指定が進められ、昭和 25 年(1950)に中城公園として開園された。

その他、教育機関に関しては、戦前まで喜舎場集落にあった喜舎場国民学校が戦火で焼失したため、昭和 20 年(1945)に安谷屋集落において安谷屋初等学校が新しく開校された。昭和 21 年(1946)には名称を喜舎場分校に改めたものの、その後の移転や改称を経て、昭和 27 年(1952)には北中城小学校へと改称し、昭和 29 年(1954)に現在の小学校がある喜舎場集落敷地へと移転した。また、北中城中学校は昭和 23 年(1948)に創設された。

戦後復興が進む一方で、引き続き沖縄に駐留していた米軍は朝鮮戦争やベトナム戦争の影響により基地を強化しており、軍人軍属の増加による住宅建設が基地外でも進むことになった。いわゆる外国人住宅と呼ばれるコンクリート造の平屋住宅であり、昭和 25 年(1950)～昭和 45 年(1970)代にかけて建設が進み、昭和 47 年(1972)の沖縄復帰後は民間にも貸し出されるようになった。村内ではキャンプ瑞慶覧が立地しており、それに伴って、安谷屋、島袋、瑞慶覧に外国人住宅地が建設された。築 50 年を経過した現在でも住宅やカフェとして、手を加えられながら利用されている。

②祖国復帰以降（1972年～）

昭和47年(1972)5月15日、沖縄県の日本本土復帰に伴い、施政権が米国から日本へ返還された。中城城跡や中村家住宅、萩堂貝塚は、復帰と同時に日本国の法律により史跡、重要文化財に指定された。

復帰後は昭和58年(1983)に中央公民館、平成2年(1990)に総合福祉センター、平成3年(1991)に若松公園、平成14年(2002)にしおさい公苑、平成20年(2008)にあやかりの杜(村立図書館等)、平成27年(2015)に大型ショッピングセンター(軍用地跡地利用)などの主要な公共施設等の整備が進むとともに、北中城まつりや「わかてだを見る集い」等のイベントを通じて、民俗芸能の保存継承、中城城跡の活用等に取り組んでいる。



■あやかりの杜



■中城城跡でのイベント時に実施された伝統芸能
(協力：中城城跡共同管理協議会)

平成6年(1994)には、中城城跡に近接する萩道、大城集落を対象に歴史的景観の保全修景等を図るため「古城周辺歴史的景観整備事業」に着手し、官民協働で計画作成や設計を行い、両集落内の湧水(大城アガリヌカー、萩道ヒージャーガー等)や兄弟広場等の景観整備に取り組んだ。この事業を契機に両集落では、住民がそれまでの旧暦行事や伝統芸能に加え、地域づくりにも積極的に参加するようになり、平成11年(1999)には「古城周辺景観協定」(紳士協定)を結ぶとともに大城花咲爺会なども発足し、集落美化に取り組んでいる。平成16年(2004)には、世界遺産中城城跡と両集落を結ぶ道筋が「美しい日本の歩きたくなる道500選」に、平成20年(2008)には萩道・大城の10箇所湧水が「平成の名水百選」に選定された。

また、平成4年(1992)には公有化事業により中城城跡の管理が北中城村と中城村に移管され、平成6年(1994)に両村による中城城跡の維持管理のための組織となる「中城城跡共同管理協議会」が設立された。平成9年(1997)には、北中城村と中城村の両村にまたがる中城城跡を含む一帯の地域97.8haが都市公園(広域公園)に指定され、同年から一部供用開始となり、現在も整備が行われている。さらに、平成12年(2000)には、中城城跡が「琉球王国グスク及び関連遺産群」の構成資産の一つとして、首里城跡や勝連城跡などとともに世界遺産に登録された。大城・萩道集落の一部は、中城城跡の緩衝地帯(バッファゾーン)として設定され、資産及びその周辺の歴史的景観を保全するための区域に位置づけられている。

(2) 関わりのある人物

①喜舎場公 (生没年不詳)

喜舎場公は、喜舎場村の創建者といわれる。『球陽』(乾隆10年(1745))の外巻『遺老説伝』に、「往昔、喜舎場公ナル者有り、此ノ村ヲ創建ス。因リテ喜舎場村ト名ヅク。是レ故ニ今ニ至ルマデ毎年二月、村長皆其ノ墓ヲ祭ル。墓ハ本村後岩ニ在リ」(原漢文)と記されている。喜舎場公は、仲順大主と同時代の人ともいわれているが、定かでは



■喜舎場公の墓

ない。喜舎場公の墓は喜舎場公園の後方、丘陵傾斜面の中腹にあり、字シーミーや喜舎場公例祭の際に拝する場所となっている。

②義本(1206年～没年不詳)

舜天王統3代目の王と伝えられる人物。在位11年(淳祐9年(1249)～開慶元年(1259))。舜馬順熙が父で、舜天の孫にあたる。淳祐9年(1249)に即位したが、国中に飢饉や疫病がはやり、人民の半数が死んだ。英祖なる人物に国政をとらせたところ、災いがおさまった。開慶元年(1259)、英祖に



■ナスの御嶽

位を譲るために隠れ、その後の消息は不明、と『中山世譜』は伝える。その墓と伝えられるものが、北中城村仲順、国頭村辺戸など数か所に存在している。伝承では、王位を退いた義本は各地を流転した後、仲順大主のもとに身を寄せ、同地で没した。義本は王妃御墓に葬られ、その後、義本の子孫らが舜天と舜馬順熙の遺骨を元の墓所からナスの御嶽に移葬したという。

③仲順大主 (生没年不詳) 13世紀初め頃

仲順が村建てされた頃の統治者である。仲順大主には、開慶元年(1259)に英祖に王位を譲り、放浪していた義本を匿ったという伝承があることから、13世紀中葉の人物だと考えられる。仲順大主とその息子たちが登場する『仲順流り』は、親孝行を主題とした短



■仲順大主之墓

編劇である。その仲順大主にまつわる伝承が念仏歌となり、それがエイサーの歌となって各地に定着していき、現在では代表的な曲の一つとなっている。仲順大主の墓は仲順原にあり、^{あざ}字シーミーや仲順大主例祭の際に拝する場所となっている。

④^{ごさまる}護佐丸（生年不詳～1458年）

15世紀中葉の中城^{えいらく}按司。永楽14年(1416)の第一尚氏^{しょうはし}尚巴志^{ほくざん}の北山征伐に従軍し、今帰仁^{なきじんぐすく}城を攻落。初代の北山監守として今帰仁城に駐屯した。その後、座喜味城や中城城を築いたことにより名築城家とされた。天順2年(1458)に勝連城主阿麻和利に謀られ、自刃して果てたといわれている。組踊『二童敵討』のモチーフになった人物。



■中城城跡

⑤^{うかくしくけんゆう}大城賢勇（生没年不詳）15世紀頃）

尚泰久王に仕えた武将。『球陽』に「其の人となりや、忠義剛直にして武勇無比、骨格人と異なり、勢狼虎の如し。是れに由りて当時の人、鬼大城と呼ぶ」とある。天順2年(1458)、勝連城主阿麻和利討伐にあたって首里王府軍の総大将となり、攻め滅ぼして大功をたてた。これにより、大城は越来・具志川^{ももとふみあがり}両間切の地頭となり、百度踏揚を妻にした。



■鬼大城の墓（出典：沖縄市 HP）

第二尚氏王統によって誅殺されたといわれ、その墓は知花^{ちばな}グスクの中腹にある。

⑥^{なかくすくわかまつ}中城若松（生没年不詳）15世紀頃）

安谷屋の若松ともいう。組踊『執心鐘入』の登場人物のモチーフになった人物で、第二尚氏尚円王と安谷屋ノロとの間に生まれた子ともいわれる。安谷屋城主となり、のちに首里に上がり、上間村^{うえまむら}の地頭職につき、「章氏^{しょうし}」の始祖になったといわれる。現在の若松公園内に墓や屋敷の火の神跡が所在する。



■中城若松の墓

⑦^{たまぐすくちょうくん}玉城 朝薫 (1684～1734年)

組踊の創始者。古典女踊の創作者ともいわれる。組踊は、康熙57年(1718)に創作され、翌年の冊封使歓迎の重陽の宴ではじめて上演された。『二童敵討』、『執心鐘入』、『女物狂い』、『孝行の巻』、『銘苅子』が<朝薫の五番>と称されている。



■執心鐘入（北中城まつりでの上演）

⑧ペリー (1794～1858年)

Mathew Galbraith Perry 米国海軍軍人。19世紀頃、日米和親条約と琉米修好条約の締結者。日本開国交渉のために米国東インド艦隊をひきいて日本に遠征し、その遠征中にペリーは那覇に5度寄港滞在した。咸豊3(嘉永6)年(1853)の寄港の際には、探検隊を編成して沖縄本島内の調査を命じた。その際、同探検隊は中城城跡を訪れて調査を行い、測量図やグスクを描いた風景画を残している。



■マシュー・ペリー
(出典：The Metropolitan Museum of Art, Open Access Collection など)

⑨^{とりいりゅうぞう}鳥居龍蔵 (1870～1953年)

明治37年(1904)に荻堂貝塚を発見した人類学者・考古学者。徳島県出身。

考古学、地質学、古生物学、言語学などを修め、東京帝国大学助教授、上智大学教授などを歴任。北は千島、カラフト、シベリア、南は東アジア地域、沖縄、台湾、中国南西部山間地帯にいたる地域を調査し、多くの研究実績を残した。明治27年(1894)に「琉球ニ於ケル石器時代ノ遺跡」という論文で八重山出土の石器を紹介しているが、実際に沖縄に調査に来たのは明治37年(1904)である。鳥居は、沖縄本島・八重山諸島の調査成果に基づいて考察し、北の沖縄諸島と南の八重山諸島とでは文化内容に違いがあることを指摘した。沖縄本島の土器に関しては、日本本土の系統であるとし(アイヌ式土器)、沖縄の先住民についても言語や体質のうえから、アイヌ的で本土と同一であるとした。



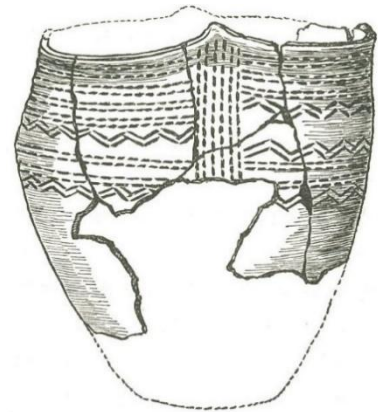
■鳥居龍蔵
(徳島県立鳥居龍蔵記念博物館所蔵)

まつむらあきら
⑩松村 瞭 (1880～1936 年)

大正8年(1919)に人類学上の調査で来島した際、鳥居龍蔵が発見した菰堂貝塚の発掘調査を行った形質人類学者。考古学にも造詣が深い。東京都出身。東京大学理学部人類学選科を修了。

菰堂貝塚の発掘調査は、沖縄において初めて考古学本来の領域において進められた調査として学史上高く評価され、その後の発展に大きな役割を果たした。当時、考古学の分野では無視されがちだった自然遺物にも目を向け、海産貝のほか陸産マイマイも多量検出されたことに注目し、後者も重要な食糧資源の一つであったと考察した。また、土器の研究は精緻で、菰堂貝塚の45種の土器文様を5種類にまとめた。

松村は菰堂貝塚の発掘調査を報告書にまとめ、その中で、沖縄の石器時代人は日本をその起源地とし、しだいに「押サレ押サレテ」沖縄に至り、独自の個性をもつようになったという卓見を表明している。



第十圖 菰原サレタル土器 其一 1/3

■松村博士の調査によって報告された土器
『琉球菰堂貝塚』(昭和58年) 1983)

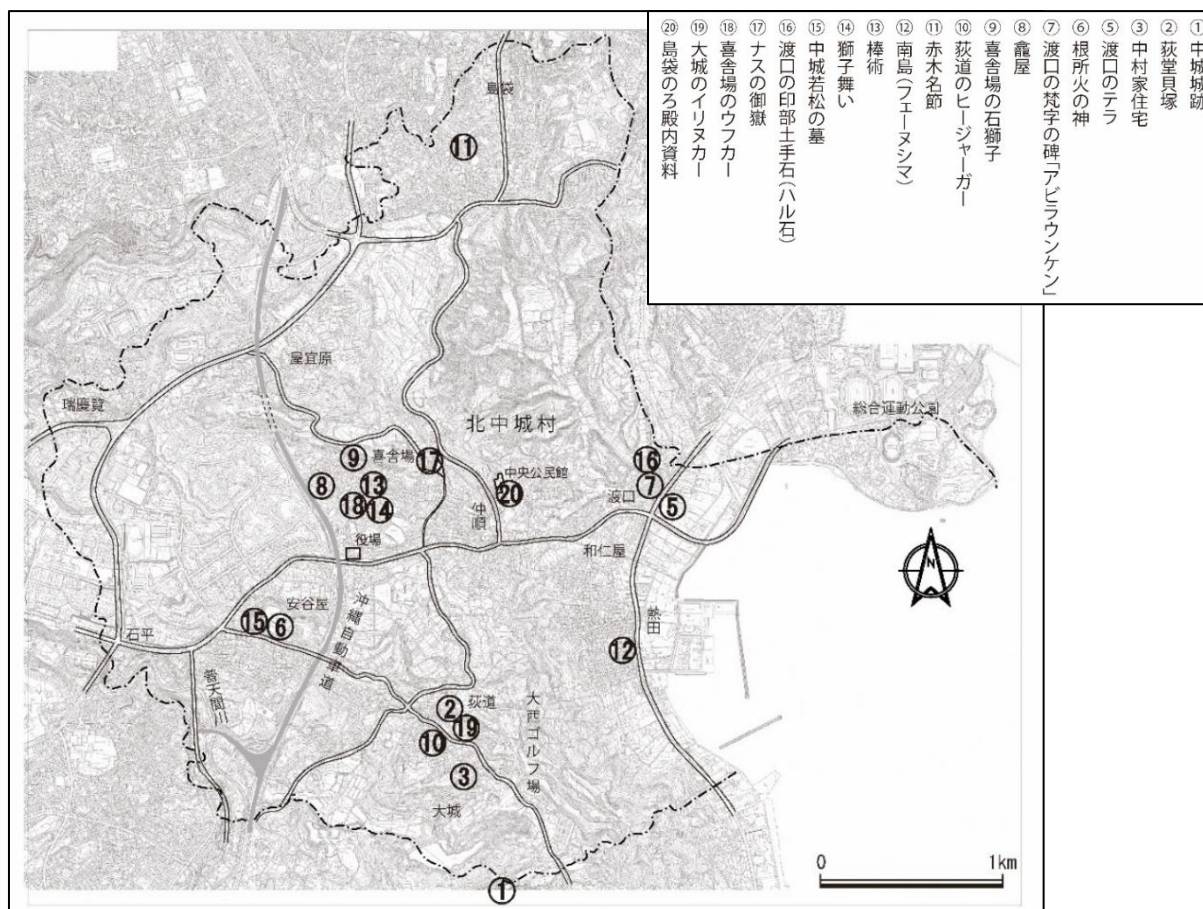
4. 文化財等の分布状況

本村には令和7年(2025)5月現在、3件の国指定文化財と2件の県指定文化財、15件の村指定文化財が現存している。また、記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財、いわゆる国の記録選択にあげられている「沖縄の綱引き」は、本村でも複数の集落で行われており、後世に継承すべき重要な民俗文化財といえる。

■文化財種別件数表

		国指定	沖縄県指定	北中城村指定
有形文化財	建造物	1		
	工芸品		1	
	歴史資料			1
民俗文化財	有形の民俗文化財		1	5
	無形の民俗文化財			4
記念物	遺跡	2		5
合計		3	2	15

■指定文化財分布図



(1) 国指定等文化財

中村家住宅（重要文化財・建造物）

中村家は、俗に大城安里ウラダスク アサトウと称し、地頭代(役職名)を務めたこともある豪農の家柄である。建物は約250年前に首里にあった土族の家を移築したと伝えられる。屋敷は、南面する傾斜面を切り開き、主屋ウフヤ、あさぎもみぐら（離れ座敷）、メーヌヤ 靱倉、前の屋（畜舎）、フール（豚舎兼便所）を配置している。東、南、西を石垣で囲み、南側と東側は防風林として福木を植えてある。建物の木材はすべてチャーギ(イヌマキ)、イーク(モッコク)を使い、屋根は本瓦葺き、漆喰塗りで、母屋の上に魔除けの獅子がある。建築当時は、地方において瓦葺きは禁制であったので竹茅葺きであった。



萩堂貝塚（史跡）

萩道集落の北側の琉球石灰岩丘陵崖下に形成された3,000年～3,500年前の貝塚である。この貝塚は明治37年(1904)に鳥居龍蔵とりいりゆうぞう氏が発見し、その後大正8年(1919)に松村瞭まつむらあきら氏によって発掘調査が行われている。調査の結果、3枚の堆積層から土器、石器、貝殻、イノシシの骨などが発見されている。土器は「萩堂式土器」と型式設定されている。昭和47年(1972)5月15日に国の史跡に指定された。



中城城跡（史跡）

中城グスクは、中城村と北中城村にまたがる標高約160mの石灰岩丘陵地に築かれた6つの郭やまじろからなる山城である。中城グスクの名が出てくる最も古い文献は、朝鮮王の命により申叔舟しんしゆくしゅうが著した『海東諸国記』(成化7年(1471))で、その中の「琉球国図」に「中具足城」と記されている。築城年代は不明であるが、創建は先中城按司で、後に首里王府によりこの地に移封いほうされた護佐丸が三の郭・北の郭を増築したといわれている。本グスクは城壁の石積みに特色があり、一の郭・二の郭・西の郭・南の郭には野面積みと布積み、三の郭・北の郭にはあいかた積みが用いられている。この石積み技

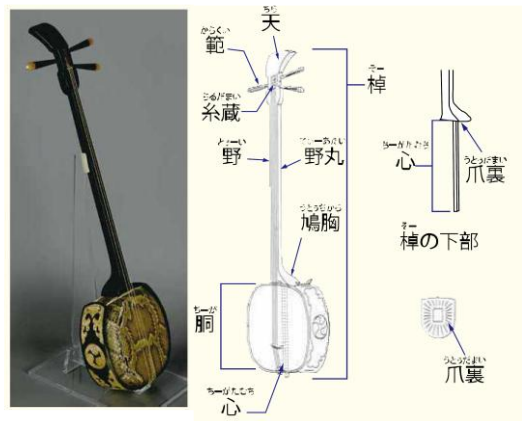


法の違いは、築城の時期差によるものと考えられている。堅牢な城壁や美しいアーチ門などからグスク築城史上屈指の名城といわれ、県内のグスクのなかでも往時の姿を最もよく残している。平成12年(2000)12月、「琉球王国のグスク及び関連遺産群」の九つある構成資産の一つとして世界遺産に登録された。

(2) 県指定文化財

三線与那型 (有形文化財・工芸品)

与那型は与那城型の通称で、三線の七つの型の一つである。名工・与那城が創作したことからこの名称がつけられている。この三線の特徴は、野が糸蔵の端まで一直線で、天は糸蔵の先から曲がり、範の穴は表面より裏面に近い位置に開けられているところにある。同じ時期に創案された真壁型と比べ、棹はより太く、糸蔵が長く、鳩胸が大きい。心には「衡向荣」と朱書きされている。



■資料：個人所蔵/画像提供：
沖縄県立博物館・美術館

渡口のテラ※1 (有形民俗文化財)

渡口交差点の北東側、約130mの平坦地にある南向きの石造建築物。テラの構造は、桁・梁とも約3.4m、高さ1.35mの方形造りで、石灰岩の屋根の頂上には宝珠がある。壁は大方切石の布積みで、側面と背面に部分的に野面積みが認められる。前面入口部分の天井は、一枚の琉球石灰岩で、他の天井材は第三紀砂岩である。中には高さ50～80cm程度の砂岩(ニービヌフニ)が四個あり、他に小石がいくつかある。これらの石は、ビジュール、ボージャーブトゥチ(赤子の仏)、クワンマガハンジュウヌカミ(子孫繁栄の神)などと呼ばれている。一般に子宝に恵まれない婦人が、子を授かるように祈っている。『琉球国由来記』(康熙52年(1713))に「往昔、渡口村高時ト申者、靈石ヲ権現ト崇、宮建立仕タル由、伝アリ」とあり、権現信仰の受け入れと変遷を知るうえで貴重な拝所である。



地元では「和仁屋間のテラ」の呼称が一般的であるが、渡口地区に所在するため、「渡口のテラ」として昭和56年(1981)2月9日に県の有形民俗文化財に指定された。

※1 テラ：一般的に、神の鎮座する場所を指す用語

(3) 村指定文化財

■北中城村指定文化財一覧

種別	名称	所在	所有者 保持・保存団体等	指定年月日
有形文化財 (歴史資料)	島袋のろ殿内資料	字仲順435 (北中城村中央公民館内)	北中城村教育委員会	令和2年4月15日
有形民俗 文化財	喜舎場の石獅子	字喜舎場上原192	喜舎場区	平成7年6月16日
	渡口の梵字の碑 (アビラウンケン)	字渡口渡口原7	渡口区	平成9年10月1日
	根所火の神	字安谷屋126	安谷屋区	平成14年12月12日
	龕屋	字喜舎場西原763	喜舎場区	平成7年6月16日
	荻道のヒージャーガー	字荻道26番地	荻道区	平成22年3月16日
無形民俗 文化財	南島 (フェーヌシマ)	字熱田68-1 (熱田公民館内)	熱田南島保存会	昭和55年2月9日
	棒術	字喜舎場75 (喜舎場公民館内)	字喜舎場民俗芸能保存会	昭和57年3月18日
	獅子舞	字喜舎場75 (喜舎場公民館内)	字喜舎場民俗芸能保存会	昭和57年3月18日
	赤木名節	字島袋102 (島袋公民館内)	字島袋民俗芸能保存会	平成14年12月12日
史跡	中城若松の墓	字安谷屋西後原1447	個人	昭和57年3月18日
	ナスの御嶽	字仲順西原169	仲順区	平成7年6月16日
	渡口の印部土手石 (原石)	字渡口渡口原7	渡口区	平成9年10月1日
	喜舎場のウフカー	字喜舎場81	喜舎場区	平成16年8月5日
	大城のイリヌカー	字大城141-1	大城区	平成16年8月5日

島袋のろ殿内資料 (有形文化財・歴史資料)

島袋のろ殿内資料(有形文化財・歴史資料)は、島袋のヌンドウンチに保管されていた、ノロの祭祀活動等にかかわる資料群。勾玉や丸櫃、ノロの辞令書を含む古文書、衣裳など約60件が確認されている。令和2年(2020)4月15日に村の有形文化財に指定された。

渡口の梵字の碑 (アビラウンケン) (有形民俗文化財)

渡口の殿のある丘陵の東崖下に東向きに建っている。古代インドの文語を梵語(サンスクリット)といい、その梵語を記する文字が梵字である。碑は、高さ104cm、幅55cm、厚さ13cmの細粒砂岩(方言名:ニービヌフニ)を利用している。アビラウンケンは、胎蔵界大日如来の真言の意で、宇宙の生成要素の地、



水、火、風、空(空間)を表し、梵字五文字に一切の万象を網羅(のこらず取り入

れること)するとされる。「胎蔵界」は、真理の面をいい、胎児が母の胎内にいるように真理が内在していることを示し、「大日如来」は、密教の根本仏をいい、大日は太陽の別名である。『北中城村史』(昭和45年(1970))によると、渡口の拝所の北側にある家々に火災などが続出したため、ユタに占ったところ、拝所の下に地位の高い先人の遺骨があり、それを掘り出して祀れ、とお告げがあったので拝所の下を掘ってみると、人骨や石器類とともにこの梵字碑が出土したとある。この碑は、現在地に移される前は、渡口36番地1の屋敷の塀に北西を向いて建っていた。平成9年(2027)10月1日に村の有形民俗文化財に指定された。

その他にも、本村には全部で11基の梵字碑があり、梵字碑の数が県内で最も多い市町村となっている。

ニードウクルヒヌカン 根所火の神(有形民俗文化財)

安谷屋の集落は、かつて安谷屋グスクの西側一帯の安里原にあったといわれる。根所火の神(ニードウクルヒヌカン)は、この一帯に集落発祥にかかわる家があったことを歴史的に示す拝所で、字のほとんどの祭祀で拝まれる。祠は琉球石灰岩を組み合わせて造られ、大きさは、幅が約180cm、高さ約150cm、奥行き約140cmである。祠の中には三個の石が安置されている。平成14年(2002)12月12日に村の有形民俗文化財に指定された。



荻道のヒージャーガー(有形民俗文化財)

荻道集落の中心部、県道146号線沿いにある。大正13年(1924)の改修のとき、横穴を掘ってから水がよく出るようになり、飲料水やンブガー(産井戸)としても利用するようになったという。井戸の石積みや樋、石敷き、周囲の土留め石積みがよく残っている。



フェーヌシマ
南島（無形民俗文化財）

この踊りは、従来の踊りとは趣を異にし、先端に金環をつけた棒を打ち合わせたり、寄声を発したりするなど、激しい動きが特徴である。さらに、大きく飛び跳ねて野性味を表現する振付もみられる。

踊りは手踊りと棒踊りの二種類があり、最初に八人が歌と三味線に合わせて手踊りを演じ、その後、四人一組に分かれて棒踊りを披露する。手踊りの際は頭にずきん頭巾をかぶり、棒踊りの際は麻であしらったカツラを被る。

三線でうたわれる歌は、“タウチュンナータイ タウチュンナータイヨ チョウオーヨー ティメウターン イエチヨウハアタイ フーテーヨーフィヨ フィタイフィタイ チンサーン チントーンヨーオーサイ チューサイヨー スイナー”（歌意不明）。

この南島フェーヌシマがいつ頃熱田に伝わったかは不明である。熱田では美里間切知花から伝わり、津堅島つげんじまの棒の型を取り入れて独特な踊りに作りあげたと伝えられている。昭和55年(1980)2月9日、村の無形民俗文化財に指定された。



獅子舞（無形民俗文化財）

獅子は百獣の王としてとうと尊ばれ、獅子舞はあらゆる災厄が払われるものとして信じられている。喜舎場では旧盆のウークイの日に悪霊を払い、五穀のほうじょう豊穰、集落の発展を祈願して演じられる。獅子舞は、はじめに一人の男(ワクヤー)がまりを両端に結びつけたひもを首にかけて、まりを振りながら獅子を誘い出して始まる。獅子の胴体には二人の男が入り、三

線、太鼓、ドラに合わせて獅子舞を演じる。昭和57年(1982)3月12日に村の無形民俗文化財に指定された。



中城若松の墓（史跡）

中城若松は、安谷屋の若松ともいい、玉城朝薫たまぐすくちょうくん作の組踊『執心鐘入』(康熙58年(1719))の登場人物のモチーフとなった人物といわれる。また、中城若松は尚円王かなまる(金丸)と安谷屋ノロとの間に生まれた子供ともいわれ、安谷屋城主になり、のち首里に上り、上間村(現在の那覇市上間)の地頭職に就き、「章氏」の始祖となったといわれる。死後、遺言により故郷の安谷



屋に葬られたと伝えられる。墓は、安谷屋集落の後方丘陵の通称ユナハンの山頂にあり、岩の前に切石を積んで囲んだ墓庭がある。昭和57年(1982)3月18日に村の史跡に指定された。

ナスの御嶽(史跡)

仲順^{ちゅんじゅん}の集落のはずれから屋宜原^{もり}へ向かう道路沿い、水道タンクの南側の杜^{もり}がナスの御嶽である。『琉球国由来記』(康熙52年(1713)成立)によると、ここに祀^{まつ}られている神は「ナスツカサ御イベ」で、安谷屋ノロが祭祀を掌^{つかさど}っていた。御嶽の中にある琉球石灰岩の大岩が御嶽の本体(イベ)だと考えられている。

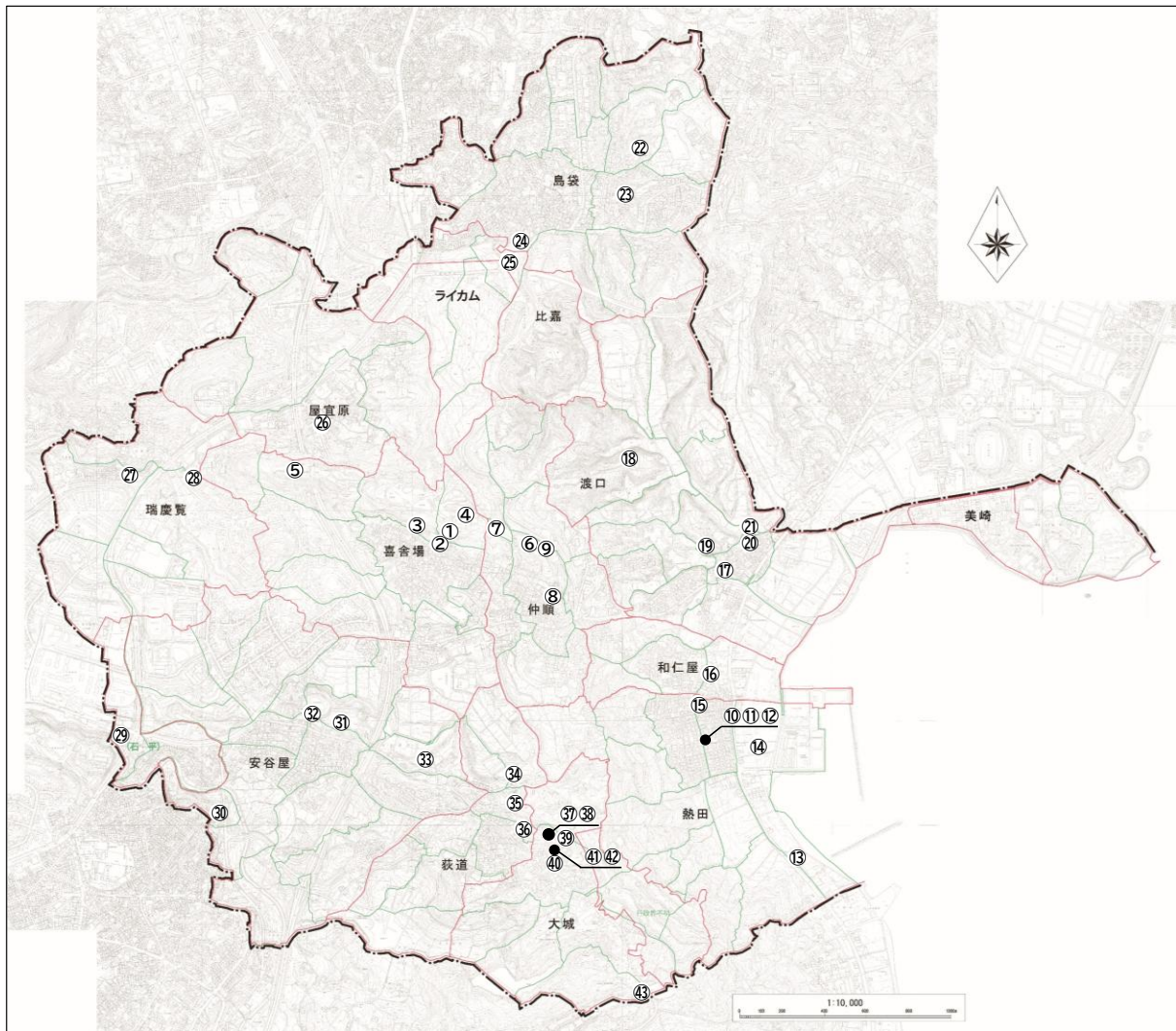


この岩の上には、舜天^{しゅんてん}・舜馬^{しゅんば}順熙^{じゅんき}・義本^{ぎほん}の三王を葬ったとされる墓がある。仲順の集落はかつてこの御嶽^{クシヤテ}一帯にあり、御嶽を「腰当て^{※2}」として南側に発展していったといわれる。平成7年(1995)6月16日に村の史跡に指定された。

※2 腰当て(クシヤテ、クサテ): 丘陵を背後に南側に広がる集落側の視点からみた丘陵の呼称

(4) 未指定文化財分布図

■村内の主な未指定文化財一覧



- | | | | |
|---------------|-----------------|---------------|-------------|
| ①喜舎場公の墓 | ②喜舎場の石獅子 | ③イラブーガー | ④王妃御墓 |
| ⑤ヒニグスク | ⑥仲順大主之墓 | ⑦仲順ビジュル | ⑧ウフカー(ンブガー) |
| ⑨仲順原貝塚 | ⑩島根殿 | ⑪アガリユーヌウトゥーシ | ⑫ンブガー |
| ⑬熱田マーシリー | ⑭熱田シー | ⑮和仁屋御嶽(カンシャギ) | ⑯ンブガー |
| ⑰米須嶽 | ⑱宮城御嶽 | ⑲和仁屋御願 | ⑳渡口洞穴遺跡 |
| ㉑ンブガー | ㉒九年堂の御嶽 | ㉓マーカーの御嶽 | ㉔島袋殿火の神 |
| ㉕ヒジャヌトゥン | ㉖屋宜原の印部土手石(ハル石) | ㉗ウカミヤー | ㉘ソージガー |
| ㉙石平ヒージャー | ㉚イチマシビラの石畳道 | ㉛安谷屋グスク | |
| ㉜中城若松の屋敷跡の火の神 | ㉝タカヒージャー | ㉞タチガー | ㉟萩道遺跡 |
| ㊱御神屋 | ㊲大城グスク | ㊳大城御嶽 | ㊴ミーグスク火の神 |
| ㊵ヌンドゥルチ跡 | ㊶喜友名根所 | ㊷久知屋根所 | ㊸伊寿留按司墓 |

ウナザラ ウ ハカ 王妃御墓

喜舎場集落の北側丘陵の頂上付近にある。琉球石灰岩の岩陰を塞いで造られた墓である。この墓は、^{しゅんてん}舜天王統三代目、^{ぎほん}義本王(泰和6年(1206)~?)の妃の墓所と伝えられる。義本王は、天災異変が相次いだことを理由に王位を英祖に譲って^{いんとん}隠遁したとき、^{くにがみ}国頭村^{へど}辺土で没したとも、仲順で没したともいわれる。ここから、約150m 東側にあるナスの^{ウタキ}御嶽に墓がある。しかし、この墓に葬られているという伝承もある。『北中城村史』(昭和45年(1970))には、義本王子の直系の子孫である花崎家の口伝として墓内には天次王(義本王)、^{まなんだるーあじ}真鍋樽按司、^{にし}西之^{あじがなし}按司加那志、^{ずし}桜尚の厨子が安置されているといわれている。



シマニドゥン 島根 殿

熱田公民館の敷地内にあり、集落のほぼ中央に位置する。一般にオミヤまたはシマニドゥンと称される。祈願の対象は、海水に浸食された大きな岩である。昭和15年(1940)の紀元2600年記念祭に本殿を石造りの拝所から現在の鉄筋コンクリート建てのお宮に建て直された。拝殿は入母屋造りの木造本瓦葺きで、軸部は戦前のものである。さる大戦前は、^{カミンチュ}神人がウマチー(旧2月15日、旧5月15日、旧6月15日)に^{みはな}御花、^{みき}線香、^{やくみ}神酒を供えて集落中の人々の健康とムジューイ(諸作物)の豊年祈願をした。現在は、字の役目(役員)が各ウマチーに拝む。



イチマシビラの石畳道

安谷屋から普天間川を渡って宜野湾市野嵩にむかう旧道で、現在でも70mほど石畳道が残っている。
名称は原名の^{ハルナー}池舩原^{イチマシバル}に由来する。

この石畳道がいつ造られたかは不明であるが、普天間川に架かっていた安谷屋橋の改修が^{かんぼう}咸豊元年(1851)に行われていることから、それ以前からあったと考えられる。



安谷屋グスク

若松公園の東側にある杜が安谷屋グスクである。グスクは南北約 80m、東西約 110mの大きさがある。北西側には石段の階段があり、ここがグスクへの入口だと考えられる。この階段を上って東側の広場がトウシ殿で、さらに東側へ進むと上の御嶽がある。その東側の岩も拝所になっており、グスク全体が聖地となっている。南側の崖下からグスク時代の土器、輸入磁器、陶器等が採集されている。



大城グスク

菰道・大城の両集落の後方にある琉球石灰岩丘陵イヌムイ(上の杜)の中央部に位置する。標高は、150m～165mで、最高部は村内で一番高い場所である。グスク内には大城御嶽があり、また、古墓も点在し、そのなかには鬼大城ウニウフグシク おおぐすくけんゆう(大城賢勇)の祖先の墓と称する墓もある。戦前まで石積みが残っていたが、戦時中に石を取り壊したという話もある。現在、石積みは北側の一部に僅かに残っている。



『北中城村史』(昭和45年(1970))によると、このグスクは英祖王の第三子中城王子の居城であったという。

(5) 特産品、工芸品、菓子・料理等

アーサ (ヒトエグサ)

村内でのアーサ養殖は昭和60年(1985)に始まり、熱田・渡口地区の良好な干潟で盛んに行われている。シーズンは1月から3月中旬頃となっており、平成18年(2006)3月には「沖縄ふるさと百選」の生産部門に認定されるとともに、平成19年(2007)には養殖拠点産地として沖縄県からの認定を受けている。現在では、スープや佃煮をはじめとする加工品も盛んに生産されている。



パッションフルーツ

北中城村のパッションフルーツは爽やかな香りと高い糖度、ほどよい酸味があり、収穫は2月上旬、6月上旬、9月上旬となっている。



ちんすこう

小麦粉、砂糖、ラードを主原料とする沖縄の伝統的な菓子。村内には老舗の製菓店があり、バラエティ豊かなちんすこう商品を作り続けている。



学校給食として登場する『マンビカー (シーラー) の姿揚げ』

北中城村の給食は沖縄でナンバーワンとの呼び声高く、メニューも豊富で、県内で行われる学校給食献立調理発表会においては、出場3度中、最優秀賞を2度受賞している。

特に子供たちに喜ばれる自慢の献立が、マンビカーを一匹まるごと使った姿揚げである。平成10年(1998)から毎年5月に提供され、令和5年(2023)で25年目となり、1メートル以上の大きなマンビカーが学級に一匹ずつ、給食の献立として登場する。



(6) 世界遺産、日本遺産等

琉球王国のグスク及び関連遺産群

沖縄本島南部を中心に点在する琉球王朝の繁栄を象徴した九つの史跡群の一つとして、平成12年(2000)12月に中城城跡は世界遺産に登録された。

琉球王朝は、14世紀頃まで三王国に分立していた琉球列島を統一して15世紀前半に成立した琉球王国の統治時代を指し、琉球王が居所とした首里城や王の統治機関であり、拝所としての役割も持つグスク(中城城・今帰仁城・座喜味城・勝連城)、

宗教的聖地であった御嶽などが世界遺産を形成している。これら遺跡群は、当時の琉球が日本や近隣諸国から政治・文化・外交の面で受けた様々な影響を象徴しており、琉球独自の王国文化をうかがい知ることのできる貴重な文化遺産として登録された。



(『沖縄県 HP』より)

■琉球王国のグスク及び関連遺産群

1. 今帰仁城跡			
沖縄本島の北部を治めていた北山の王が住んでいた城。約1,500メートルにもおよぶ城壁は、自然の地形にあわせてつくられ、美しい曲線となっている。	資産面積	7.9ha	
	緩衝地帯面積	25.3ha	
	合計	33.2ha	
2. 座喜味城跡			
護佐丸が北山を監視するために15世紀前半に築城された。切り出した石で組んだアーチ型の石門は、沖縄本島に現存するもっとも古い石門と考えられている。	資産面積	4.4ha	
	緩衝地帯面積	78.9ha	
	合計	83.3ha	
3. 勝連城跡			
12~13世紀に築城され、沖縄本島中部の東海岸一帯を一望できる場所に立地。当時、有力な按司であった阿麻和利が住んでおり、王位をとるために首里城を攻めたが、敗れて滅びた。	資産面積	13.2ha	
	緩衝地帯面積	44.2ha	
	合計	57.4ha	

4. 中城城跡			
勝連城主の阿麻和利をけん制するために、座喜味城主の護佐丸が、15世紀の前半頃に国王の命令で築城。	資産面積	12.3ha	
	緩衝地帯面積	178.1ha	
	合計	190.4ha	
5. 斎場御嶽			
沖縄随一の聖地として知られており、琉球国の宗教的儀礼や自然信仰の場所とされている。国王も何度も訪れたほか、王妃などが国の神事をおこなう ^{きこえおおきみ} 聞得大君の職に就く際に儀式を行う場所。	資産面積	4.5ha	
	緩衝地帯面積	12.1ha	
	合計	16.6ha	
6. 玉陵			
琉球王国の王族の墓で、 ^{こうじ} 弘治14年(1501)ごろ建造された。墓は、中室・東室・西室に分かれており、石造りで独特のデザインとなっている。平成30年(2018)、建造物として国宝に指定された。	資産面積	1.1ha	
	緩衝地帯面積	136.9ha*	
	合計	138.0ha	
7. 首里城跡			
^{せんとく} 宣徳4年(1429)に ^{ほくざん} 北山・ ^{ちゅうざん} 中山・ ^{なんざん} 南山と呼ばれていた三つの小さな国が統一されて琉球王国となり、その国王が住んでいた城。政治や文化の中心地となっていた。平成31年(2019)3月には、太平洋戦争で焼失した正殿や破壊された城郭等を含むすべての復元整備工事が完了したが、その年の10月31日の火災により正殿や北殿など八つの建物が焼失した。現在、再建に向けて工事が進められている。	資産面積	7.3ha	
	緩衝地帯面積	136.9ha*	
	合計	144.2ha	

8. 園比屋武御嶽石門 <small>そのひゃんうたぎせきもん</small>			
<small>せいとく</small> 正徳14年(1519)につくられた琉球固有の宗教建築物であり、門は扉を除いてすべて石造りとなっている。後方にある森は、聖なる地とされており、国王が出かけるときに旅の安全を祈願した。	資産面積	0.008ha	
	緩衝地帯面積	136.9ha※	
	合計	136.908ha	
9. 識名園 <small>かけい</small>			
<small>かけい</small> 嘉慶4年(1799)に王族の別邸として建造された。保養地としてだけでなく、中国の王からの使いをもてなす場としても使用されていた。現在、沖縄県内で唯一の特別名勝でもある。	資産面積	4.2ha	
	緩衝地帯面積	84.2ha	
	合計	88.4ha	

※玉陵、首里城跡、園比屋武御嶽石門の緩衝地帯面積は、3資産の合計面積